

ことりのモノ

kielly

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公皆月一哉みなづきかずやは、初恋の相手である南ことりに告白する。

付き合えたことを喜ぶ一哉だったが、ことりと付き合い合っていくうちに、彼女の異常な様子に気づき、困惑する。

「だってあなたは――」

「ことりのモノだもん」

目次

* 0	more...	1			
Sweet					
* 1	告白	disquieting			
* 2	下校	scared	11		
* 3	初デート	possessive	25		
e					
* 4	マカロン	dangerous	37		
* 5	変化	calm	56		
* SP. 1	ことり	chocol	79		
* 9	焦燥	message	147		165
* 8	揺らぎ	anxious	123		
* 7	曇天	peculiar			
S	strange	taste	108		
* 6	勉強会	jealousy			94
a	te				

* 0 m o r e . . .

「……………はどこだ？」

俺が目を覚ましたその場所は、全く見覚えのない場所だった。俺の両手には手錠がかけられていて、身動きがとれない。

ベッドの上で両手に手錠をかけられてしまっている上、首輪が付けられており、ほぼベッドに固定されてしまっているような状態だったので、回り全体を見渡すことこそできないが、状況を確認しないわけにはいかなかったため、見える範囲で見渡してみた。

見ると、周りには可愛らしい人形や、可愛らしい色合いのインテリアで埋め尽くされている。女の子の部屋なのは間違いない。

となると、思い当たる人物は俺が思いつくあたり一人しかいない。

ガチャツ、ドアを開く音がした。

姿は見えないが、それが誰なのかは分かっている。

「……………ひとりだね？」

開いたドアの向こうから、この部屋にその人が入ってきた。

「ふふ、せーかいですっ♪」

声こそいつも通りのことりだったものの、近付いてきたことりのその姿が見えた時、戦慄する。

両手には、鋭利な刃物。

そして何より、不気味な笑みを浮かべていたのだ。

「えへへっ」

「(ハ、ハ)とり……」

声だけ聞くと、いつものことりの柔らかな雰囲気を感じるのに、その姿を見た上でもう一度聞くと、なんとも言えないほどの恐怖を感じる。

不気味な笑みを浮かべながら、ことりはどんどん俺に近づいてくる。

「ことり……」

「ことりが両手に持つてるもの、みえますか？」

「……」

ことりがついに、ベッドの横まで来た。

見えますか、などと聞かれなくてもすでに見えていることくらい気づいているにも関わらず、ことりは両手に持つているものを俺に見せつける。

「これはあ、”包丁”なのっ♪ えへへ、一生懸命研いでみたんだあ♪」

ことりはそう言いながら、両手にある包丁を気持ちよさそうな表情で見つめる。

俺の身体は、この後起こるであろう出来事を想像してしまった頭に連動するように、震え出す。

「あつ、怖いのか？ ねえねえ？ ことりにこれからされること分かっちゃった?? あははっ♪」

柔らかな声から一転、狂ったような声に変わる。

高らかに、狂ったように笑う彼女は化物そのものだ。

「ふうふう……」

ようやく笑いが収まってきたかと思えば、その両手を俺の上に持つてくる。

俺の眼前には、鋭利な刃物。

「ばいばい、だよ」

「ま、まっつてこつとり」

何がきつかけでこうなってしまったのだろうか

「この包丁で、そのたくましい喉切り刻んであげる…！」

「やっやめてくれ！」

全く分からないけれど、俺の人生はここまでみたいだ。

「さようなら」

俺はそつと、目を閉じた。

俺に、触れた

柔らかな感触が

「んん……」

俺の唇に

「えへへ……本当に刺すと思っちゃった？」

その声が聞こえ、俺が目を開けると、そこにはことりの赤く染まった顔があった。

「初めて……だよね？」

「え……あ、うん、初めてだった」

柔らかな唇への感触。

それは、ことりからのキスだった。

「こ、ことり……俺ををその包丁で……」

「え？ 包丁？」

俺の質問にとぼけることり。

「あ、これ実はね？」

そう言うところりはその包丁を、ことりの口に運んだ。

「はむっ……もぐもぐ」

「……え？」

「うんっ、美味しく出来てる♪」

ことりが包丁を噛み砕いて、美味しいと言って食べている。

「ことり手作りの、チョコレートでしたっ」

「ちよ、チョコレート!?!」

「甘くて美味しいよっ、はい、あーん♡」

「あ、あー……ん!?! 美味い……!」

「えへへっ♪」

ことりに食べさせてもらって確認する。

本当にチョコレートだったのが意外な程にクオリティが高くて、俺は本当に刺されるんじゃないのかと思ってしまった。

気づけば、さっきまでの不気味な雰囲気もなくなり、いつものふんわりしたことりに戻っていた。よかった。

「じゃ、ことりはちよっど後かたづけしてくるねっ♪」

「えっ？　ちよつと待って」

チョコレートを食べ終わったあと、ことりがそう言つて部屋を出ようとする。

俺はまだ拘束されたままだということを気づいてくれてないのだろうか、俺の方を確認してくれてない。

「ことり、そろそろこの拘束具は外してくれると嬉しいなあ」

そう言う俺に、ことりは振り向き、こう言った。

「え？　外さないよ。だってあなたは——」

「ことりのモノだもん」

そう言ったことは、さつきまでの不気味な笑みを再び浮かべていた。

これは、俺みなづきかずや皆月一哉と、俺の彼女みなみことり南ことりの恋物語——

Sweet

*1 告白 disquieting

「えへへ、いいよお」

クラスの友達のお願いを快く受け入れる優しい女の子。

「ふふふつ、それ面白いねー」

無邪気な笑顔を周りに振りまく可愛い女の子。

俺、みなづきかずや皆月一哉は今日、クラスのアイドル南みなみことりことりに告白するんだ。

告白 disquieting

さつそく俺はことりちゃんを呼び出し、待ち合わせ場所の屋上でことりちゃんを待つ。

「涼しい風だな」

吹き抜ける風は爽やかで、とても気持ちのいい風だ。季節は春、温かくて優しいお日様の光に照らされながら浴びる風はとても心地よい。告白するにはもってこいつてとこだろう。今日こそこの高校に入学してことりちゃんに惚れてからの二年分の想いを伝えられるはずだ。

「皆月……くん？」

後ろから、お日様の光にも負けないくらい優しい声が聞こえた。

振り返るとそこには、お日様よりも眩しくて直視できないほど可愛い女の子の姿が。

「こ、ことりちゃん！ 来てくれたんだね」

「えへへ、お呼ばれしちゃったから。ん〜、風が気持ちいいね〜！」
「あ、ああ、そうだね」

緊張で少し言葉が詰まってしまふ俺をよそに、ことりちゃんは吹き抜ける心地よい風を身体全身で浴びていた。身体をうーんと伸ばし、制服が少し乱れてしまっているのも気にしないその姿はまさに天使。男がいるというにも関わず、手を思いつきり上に広げ後ろに反り返るようなしぐさで、その胸元を強調させて来る。本人はまったくその気はないのだろうが、俺は思わずその仕草にくぎ付けになってしまう。

「あれ？ どうしたの皆月くん？」

「えっ!? なっなんでもないよ」

「ん〜？」

ことりちゃんにくぎ付けになっていた俺を、怪しいものを見る目で見てくることりちゃん。ちよつと前かがみになって俺を見てくるその仕草が俺をさらに緊張させる。

「あ、いや、ことりちゃんが可愛かったから、つい……」

「えっ!? て、照れちやうよお」

「あっ!? あ、いやそんなつもりじゃ! いや、その、えっと」

緊張のせいで頭が働かなくなった俺はつい、本音を伝えてしまった。ことりちゃんは恥ずかしそうに顔を赤らめながら俺を見つめる。そんな可愛らしい姿を見てさらに俺は緊張する。

「ただ、ことりちゃんはあまり嫌そうな反応はしていない。それに、言ってしまったものは仕方がない。」

俺はこのままの勢いで告白に持っていく。

「ことりちゃん!」

「は、はいっ!」

「俺、俺! 入学して初めてことりちゃんを見た時から、ずっと好きでした! 俺と付き合ってください!!」

「えっ、ええっ!!」

思い切ってはつきりことりちゃんに伝えた。これでもし駄目でも悔いはない。

ことりちゃんの反応を伺うが、ことりちゃんは顔を見たことないくらい赤く染め上げながら、困惑したような様子で俺をチラチラと見る。その姿はすごく可愛いのだが、何も言わずにチラチラと見てくるため、駄目なのかどうなのか全く分からない。どうしよう、すごく緊張する。

数秒、数十秒、いや何秒待ったか緊張のせいでわからない。沈黙が続く。

「お、お願いしますー！」

その沈黙に耐えられず、追い打ちをかけるように俺はもう一度頭を下げながらことりちゃんに告白する。

次は何秒の沈黙が襲ってくるかが怖かったが、次はすぐに返答が帰ってきた。

「あの……ことりが好きって、本当？」

顔を上げると、ことりちゃんは頬を赤く染めたまま、優しい瞳で俺を見ていた。後ろで手を組み、少しだけ身体を前に倒すような形で俺を見ていたことりちゃんは、嬉しそうにほほ笑む。

「ほ、本当だよ！ 俺ずっとことりちゃんが好きだった！」

「そっかあ……えへへへっ」

いつもクラスの中でこっそりとしか見れなかったあの可愛らしい笑顔が、俺の前に、俺だけの前にある。クラスのみんなからの人気が高いことりちゃんを、独り占めしている気分だ。

ことりちゃんは、その笑みを浮かべたまま、俺に言う。

「ことりも、ずっと前から好きでした。ことりでよかったら、ぜひおねがいします」

「えっ、こ、ことりちゃんも、俺のことを？」

「う、うんっ。入学した時から皆月くんのことずっと見てたの。一目惚れ……っっていうのかな」

「俺もことりちゃんに一目惚れしたんだ！」

「え〜！ 皆月くんも、ことに？」

「うん！ いやあ、嬉しいなあ」

「ことりも……えへへ、こういうのを運命っていうのかなあ」

ことりちゃんも俺に好意を寄せてくれていたらしい。ということは俺たち二人は両想いだ。ことりちゃんも言う通り、なんだか運命じみたものを感じてしまう。

今の俺の心は、幸せ一色だ。何せクラスのアイドルことりちゃんが、俺の彼女になってくれたのだから。

「あの、皆月くん」

ことりちゃんが何かを言いたげに俺を見る。その俺を見る一つ一つの仕草が可愛くてたまらない。

俺は返事をして、ことりちゃんの言葉を待った。

「きよ、今日から皆月くんは、ことりの、か、彼氏さん、なんだよね？」

「う、うん、そうだよ」

ことりちゃんが言ってきたことで改めて気づかさされたが、告白が成立したということ、俺たちはもう付き合っている。ということはもう、この時点で俺はことりちゃんの

彼氏、逆を言えばことりちゃん俺の彼女なのだ。

改めてそれに気づかされたせいかな、俺もことりちゃんもぎこちない感じで声を放つ。

「じゃ、じゃあ皆月くん。今日からことりのこと、ことりって呼んでほしいな」

「つ!!う、うん。じゃあことりちゃんも俺の事、一哉って呼んでほしい」

「う、うん。そ、その、よろしくね——一哉くん」

「い、いちらこそよろしく——ことり」

お互いを名前で呼び合う。まだまだぎこちないけれど、確かに俺たちは結ばれた。その事実が、今の名前で呼び合うこの行動に表れている。内心、未だに両思いであることなんて信じられないのだけど、それ以上に嬉しさが勝る。

すごく、幸せだ。

キーンコーンコーンコーン

昼休みの終わりを告げる鐘の音が、俺たちの幸せな空間を引き裂く。

「あつ、昼休み終わっちゃったね」

「そう、だね。ね、ねえ一哉くん！」

「ことりが俺を呼ぶ。」

「どうしたの？」

「あ、あの！ 今日と一緒に、ことりと一緒に帰りませんか？」

ことりが俺にそんなことを言ってきた。しまった、俺は心の中で思う。こういうのって普通は俺が言うべきなんじゃねえのか？ことりにわざわざそんなことを言わせてしまったことを悔やみつつ、俺は笑顔で返事する。

「もちろん！ これから毎日一緒に帰ろうぜ！」

「わあ……うんっ！」

嬉しそうに笑うことりを見て、俺も嬉しくなつて一緒に笑った。この感じならきつと、今日からうまくやっていけそうだな。

おっと、昼休みが終わるんだったな。

惜しい気持ちでぐっと押し込め、ことりに言った。

「さあことり！ 昼休みが終わっちゃうから一緒に帰るぞ！」

風がさつきより少し強く吹き始める、そんなときだった。

「一哉くんは——ことりだけのモノだよ」

「え？ 何か言ったか？」

「ううん、なんでもないっ！ さ、いこつ、一哉くんっ！」

「あ、ああ」

風の中で言ったことりの言葉、俺は聞き取ることができないまま、ことりと一緒に教室へと戻っていった。



「ことり！ 一緒に帰ろう！」

「えへへっ、うんっ！」

ホームルームが終わってすぐ、俺はことりを呼ぶ。自然とクラスメートからの注目を浴びてしまっているが、なぜか不思議とそれが気にならない。それよりもことりと一緒に帰ることができるという嬉しきで心が飛び上がってしまいそうだ。

ことりが俺のそばまで来たとき、後ろから声をかけられた。

「あれ？ ことりちゃん、今日は皆月くんと帰るの？」

「ことりにしては珍しいですが……」

こうさかほのか
高坂穂乃果、園田海未、この二人はいつもことりと一緒にいる。

高坂は明るくて前向きな性格で、誰とでも仲良くできるような女の子で、クラスのみんなから好かれている。

園田は凛とした姿、上品な振る舞い、そして彼女が所属している弓道部での姿から、主に女の子からの人気が高い女の子、大和撫子を彷彿とさせるほどの美しさのため、女の子からの人気はもちろん、男からの人気も高い。

三人は幼馴染らしく、いつも一緒にいて、ここ音ノ木坂学院のスクールアイドル”μ’s”のメンバーでもある。

ことりはそんな二人に、何も隠すことなく告げる。

「実はね〜？ えへへ、皆月くんとお付き合いすることになりましたっ！」

俺の腕に抱き着きながら、笑顔で二人にはつきりと告げた。二人は各々違うリアクションで驚きを表す。

「ええ〜っ!! こっことりちゃんか、皆月くんとか?! いいないいなあ! 穂乃果もお付き合いとかしてみたい!」

「おっおつきあつ……破廉恥ですっ!!……けど、よかったですね、ことり」

「えへへ、ありがとう海未ちゃん！」

付き合うことに憧れて騒ぐ高坂と、破廉恥だとか言いながら顔を真っ赤にする園田。リアクションが違って面白いな……そんなことを思っただけで笑ってしまった時だった。

「——一哉くん？」

ことりが顔だけ俺の方に向ける。俺はその表情を見てゾツとする。

その顔には色がなく、感情がないというような目をしていた。

ことりに一目惚れしてからというもの、何かとことりを意識して見ていた俺でも、今まで見たことのないような顔だった。さっきまでのにこやかな表情とは一変して、今は俺は困惑する。

だが、そんな表情も一瞬だった。すぐにことりは表情を戻し、頬をぷーつと膨らませる。

「もうっ！ さっきから穂乃果ちゃんと海未ちゃんのことばかり見てますっ！ 一哉

くんの彼女はことりなんですうっ！」

俺に抱き着いたまま、軽く揺さぶってくるその姿はとても愛らしくて、思わずニヤけてしまう。それがバレてしまったらしい。

「ああ〜！ 皆月くん、ことりちゃん見てニヤニヤしてる〜！」

「やっぱり破廉恥です。ことり、襲われないように気を付けてくださいね」

「おそっ!? い、いや！ 俺はそんなことしねえから!!」

「やーん♪ ことり、一哉くんに襲われちゃいますう〜♪」

「こっことりい!!」

ニヤけてしまったのが原因で三人に遊ばれてしまった。なんか悔しい。そのあと三人に遊ばれてしまう俺だった。

*2 下校 s c a r e d

高坂と園田の二人と別れ、俺とことりの二人きりで下校している。二人きり、そう意識してしまうだけで顔から火が出てしまうくらいには緊張してしまう。

その時だった、ことりが俺を上目で見てこう言った。

「二哉くん、手つないでも、いいかな？」

下校 s c a r e d

「あつ、うん。ぜひ」

「やったあ♪ えへへ……」

しまった。今日二度目の後悔をしてしまう。普通男から手を繋ぎに行くものじゃないのか？

そして、その後悔と同時に、ことりの意外な積極性に驚きを隠せない。いつもは一緒にいる高坂や園田に合わせて動く、といった感じで、自分から何か行動を起こす女の子ではない、そう思っていたからだ。

まあその積極さがあるがために俺の意気地のなさが目立ってしまうことにいちいち悔やんでしまうが、少し一緒にいるだけで、ことりの良さがどんどん分かっていくこの感じは悪くない。

ことが俺の手を握ってきた。温かくて優しいその手は、ふわふわしていてまさにこりを表しているかのようだった。

「えへへ、恋人繋ぎ、しちやいましたっ」

「お、おう」

これまた意外なことに、ただ手を握るのではなく、指と指を絡ませる握り方、いわゆる「恋人繋ぎ」をしてきたのだ。手を握るだけでも緊張するだろうに、付き合ってから初めの手繋ぎがこれだ。実はことりって結構、自分からいくタイプだったんだな。

「これで一哉くんは——ことりのものだねっ」

「え？ ああ、そうだな。じゃあことりも俺のものだなー」

「えへへえ、一哉くんだけのもの……嬉しいっ♡」

一瞬、ことりから何か違和感を感じたが、特に気にせずのことりと会話する。何せこんな可愛い彼女から「私だけのもの」だなんて言われて嬉しくならない男はいない。恋人繋ぎしたまま腕まで絡ませて来ることにドキドキしながら、帰宅路を歩いていく。幸い二人の家の方向は同じらしく、どちらかに合わせて帰るといった必要がない。これもまた、運命のようなものを感じてしまう。

あ、そういえば。俺の頭に、ことりへの質問が浮かんだ。せつかく彼女になってくれたんだ、もつとことりのことを知りたい。

そんな思いでことりがあることを尋ねた。

「なあことり、ことりの幼馴染……高坂と園田とはいつくらいからの付き合いなんだ？」

だが、それがいけなかったんだ。

ことりの目の色が、なくなる。

「…………え？ どうして今それをことりに聞くの？」

明らかにさつきまでとは違う態度に、俺は今日三度目の後悔をする。俺は単純にことりのことをもつと知りたい、ことりともつと話したい、そう思つてことりに質問を投げかけたが、普通に考えれば彼女と一緒にいるつていうのに、別の女の子の話をする馬鹿なんていない。つくづく俺の頭の悪さに呆れる。

俺は慌ててことりに謝る。

「ごめんっ！ ことりがいるつていうのに、他の女の子のこと話すだなんて、馬鹿だったよな。ごめんっ！」

「……………」

ことりは無言で、色のない目で俺を見続ける。

何も言わない、表情がない、それがただならぬ恐怖を感じさせる。

俺の手を握ることりの指が俺の手に食い込む。その痛さも恐怖をさらに煽ってくる。数秒の沈黙ののち、ことりは口を開いた。

表情に色を戻して。

「ううん、ことりもちよつと過度に反応しすぎちゃったかも。ごめんなさいっ」

俺が悪いというのに、怒ってしまったことに謝ってくることり。

……本当にことりは優しいんだな。俺には勿体なさすぎるくらいだ。

「ごめんな、次からはことり以外の女の子の事、話さないようにするからさ」

「……うん、お願いします」

につこりと笑って見せることりに胸を打たれた俺は、ことりを思わず抱きしめる。

「本当にことりは優しい女の子なんだな。大好きだ」

そう、こういう優しさに惚れた、そう言ってもいいくらいにことりが可愛く見える。

「あう……いきなり抱きしめてくれるなんてずるいですっ」

「ははっ、可愛いよことり」

「ううっ」

俺の言葉一つ一つに頬を膨らませるその様子も、本当に愛らしい。俺は今、最高に幸せだ。

「一哉くん」

「ん、どうしたんだことり？」

「あの……もうちよつとだけ、このままでいても、いいですか？」

「……うん。俺ももつと、こたりのこと抱きしめていたい」

「……もうっ、なんで恥ずかしくなることそんなに簡単に言うんですかっ」

「いや、それはことりには言われたくないけどね」

頬を膨らませたままのことりから怒られてしまったが、それに関してはことりからは言われたくない。こわりに散々先を越されてしまってるから頑張って言ってみただけなのに。

まあ、頬を膨らませたことりは小動物のような可愛さを感じられるから、このままでいるのも悪くないかもしれない。

ちよつと意地悪かもしれないが、俺はそつとこつりの頭を撫でてみた。

「ふにやつ?! あうう」

「ふにやつ、だつて。可愛いなあことりは」

「ちよ、ちよつとお、急にしないでよお」

「あははつ、可愛い可愛い」

「うう……絶対に馬鹿にしますう」

ことりは馬鹿にしてるだなんて言ってるが、本当に可愛い……やつぱり、俺には似合わないくらいに魅力が詰まった女の子だな、ことりは。

そんなことを思った時だった。

俺の手に絡ませていることりの指に、力が入る。

「一哉くん」

「どうしたの？」

少し深刻そうな表情を浮かべることに、俺は少し不安になる。

まさか、やつぱり俺じゃ釣り合わない、とか？息をのんでことりの言葉を待った。

だが、ことりが言った言葉は、俺が思っていたものと正反対のものだった。

「もし、もしことりのことを、変だなあって思ったとしても、ことりのことを好きでいてくれますか？」

その言葉は、むしろ俺がことりに聞きたいくらいのネガティブな言葉だった。ただ一つ、”変だと思っても”という言葉は引つかかるが。

俺はことりを強く抱きしめなおし、口を開く。

「もちろんだ。どんなことりでも俺は好きでいるよ。そうでなきや告白なんてできない

「やっ」

紛れもない本心だ。俺がことりを嫌いになるわけなんてない、何せ二年來の想いがやっとうつたんだから。

俺の言葉を聞いて、こどりの表情が明るくなり、握る手も力を緩めた。

「えへっ、えへへっ」

「やっばことりは笑ってる方が可愛いよ。これからもずっと俺のそばで笑ってほしい」

「うんっ！ やっぱりことりは、一哉くんのが大好きですっ」

今まで見てきたどの笑顔よりも眩しい笑顔を見れた俺の心は、嬉しさと安堵でいっぱいになった。

そのあとは何事もなく、ことりや俺の好きなものとかさういったあたりなことを聞いたり聞かれたりしながら歩いていった。



「ことりの家はここだよつ。送ってくれてありがとう、一哉くん」

「おう、また——明日も一緒に帰ろうな」

「うんっ！ それじゃあねっ」

「また明日！」

ことりを家に送り届け、別れを告げたあと、俺は自分の家へと歩みを進める。思っていたよりことりの家は俺の家と近いらしく、ここからなら5分くらいで着けるだろう。

今日一日の事を振り返りながら、俺は歩く。

今日の昼休みに告白した、実はことりも俺のことを好きだったらしくて、初日にもかかわらず名前で呼び合ったり、手握ったり、抱きしめあったり……

とても一日で起こったこととは思えない濃厚な内容に、俺はついついニヤけてしま
う。

「にしてもやっぱ、ことりって可愛いよなあ」

周りに人がいないことをいいことに、つい口に出して言ってしまった。うわあ、惚気てんなあ、俺。

顔を引き締め、残り僅かの帰宅路を歩き出そうとした時だった。

「……………」

なぜだろう、人の気配を感じた。周りを見渡しても誰もいない。そしてここは割と道が開けているから、隠れるような場所もないはず。だから人がいればすぐに分かるはずなんだが……気のせいかな？

「ちよつと不気味だな……走って帰るか」

少しばかりの恐怖を感じながら、俺は走って家へ帰るのだった。

だが、俺が家に入るその瞬間まで、謎の視線は感じたままだった。

「えへへ、今日は走って帰っちゃったんだね、一哉くん」

「それにしても……はあ♡ 走る一哉くんもカッコいいっ」

「ふふっ、でも今日からは”憧れ”じゃないもんっ。だって一哉くんは
」

「ことりだけのモノだもん」

*3 初デート possessive

『一哉くん！ 今度の休みにデートしよう』

俺とことりが付き合い始めて間もないころ、ことりからデートのお誘いがあった。ことりの方から誘ってくれるとは思っていなくて、これ以上にないくらいテンションが上がりまくっている俺。しかしその反面、初めてのデートくらい俺から誘いたかった、なんて気持ちもなくはない。

だが、もうそんなことはどうでもいい。あの憧れだったことりと2人で、しかもことりの方からお誘いがあるだなんて今までの俺には到底信じられそうにもない出来事だ、この幸せを噛みしめよう。

そんなことを思っている俺は、すでにデートの待ち合わせ場所である駅の前で立って待っている。

テンションが上がりすぎて全く寝れず、待ち合わせ時間の2時間も前だということにも関わらず、気持ちを抑えきれず家を飛び出してきたというわけだ。

さて、ことりを待つてる間何してようかな。まだまだ時間はあるし、カフェくらい入ってくつろいどくか？

そんなことを思っていたときだった。

「一哉く〜ん！ お待たせ〜！」

「えっ!? ことり!?!」

聞くだけで癒される俺の大好きな声が、俺を呼ぶ。声が聞こえた方を振り返ると、そこには愛しの彼女の姿が。

「遅くなってごめんね〜、はあ、はあ」

遅くなってごめんと謝ることりの息は荒れていて、急いできてくれたのがよくわかる。ただ、今はまだ集合時間の2時間前、そもそも遅刻どころかかなり早すぎる到着なのだ。

「いやいやことり、遅れてないし、むしろ早すぎるくらいだぞ?」

「えへへ、少しでも早く一哉くんに会いたかったから……」
「ことり……」

なんだこの天使は。思わずそう言いたくなるほどに可愛いことりは今、俺のために早々と会いに来てくれた。嬉しさのあまり叫びたくなるが、ぐつとこらえ、その代わりにことりの手を優しく握る。

「ありがとうことり、俺も早く会いたくてさ。ことりも同じ気持ちだっただなんて、嬉しいよ」

「一哉くん……やっぱりことり、一哉くんのこと大好きっ」

「おっと……俺も好きだよ」

「えへへ」

抱き着いてくることりを体勢を少し崩しつつも受け止め、抱き合う。本当に両思いなんだ、そう実感できる。つて、気づいたら周りの人たちからめっちゃ注目されてんじゃない！

俺は慌ててことりと離れようとする。

「こ、ことり、周りの人たちから見られてるから、いったんここから離れようか」

そう言つてことりから離れようとしたのだが、ことりは気にもしない様子でなおくつき続ける。

「やだやだ、離れちや嫌っ！」

「き、気持ちは嬉しいんだけどさ、ほら、周りが」

ことりが可愛らしい駄々をこねるけど、今のこの状況においてはその駄々はあまり好ましくない。そう思いつつ周りを確認すると、なぜかさつきより人が多くなってる気がする。やばいぞこれ。

1人で慌てている俺に、ことりはいたって冷静に言い出す。

「ことりには一哉くんしか見えないもんっ」

「……っ!?!」

可愛い声で嬉しいことを言ってくれたのだが、その瞳には色が無い。これって高坂たちと一緒にいたときに見せたあの怖い瞳……でも今回は別に他の女の子の名前なんて出してないし、なぜ……

「お願い、ことりだけを見て？」

落ちていてことりの様子を観察してみると、ことりはなぜか俺から一切目をそらさない。逆に俺がことり以外の方を見ようとすると、頬をそつとつかんでことりの方に向かせようとしてくる。

そうか、俺は理解する。

どうやらことりには、俺以外の人間を見る気がないらしい。

色のない瞳を俺に向け続け、一向に離れてくれる気配のないことり。でも、それだけ俺のことを好きだと思ってくれている証拠。だったら俺も、男として応えたい。しかしことじやちよつと場所が悪い。

俺は深呼吸をして、ことりに言う。

「ことり、ことじやちよつくりできないから、場所を移動してそつちでいっぱい抱きしめ合

おうよ」

我ながら照れもなくよく言えたものだ、と自画自賛しながらも、ことりの様子を窺う。すると、目の色が戻った。

「あ、そうだよね、せつかくならゆつくりできる場所に移動したいもんね！」

そう言うところりは抱き着くのをやめ、代わりに腕を絡ませるように組んで、指と指を絡ませるように手を繋いできた。

「はいっー」

嬉しそうに笑うことりを見て一安心した俺はことりの手を握り返し、ことりと一緒に歩き出した。



「ことり、ここのベンチでだったらゆっくりできそうだね」

「そうだね！ 一緒に座ろ？」

「うん」

どれくらい歩いたかは分からないが、ことりとお話しながら歩いているといつの間にか人気のない公園まで来てしまっていた。その公園にあったベンチでとりあえずいったん休むことに。

「結構歩いちゃったね」

「そうだな、ことりはきつくくない？」

「一哉さんと一緒だから平気だよ！」

「ふふ、そっか」

ことりが大丈夫かどうか心配だったのだが、流石はスクールアイドルだけあって全く問題ないらしい。そして、俺と一緒にだからと言ってくれたのがすごく嬉しい。

青葉が生い茂るこの季節、吹く風にも少しの熱を感じる。でもそんな熱さも気にならなくらい、今の俺たちは熱いだろう、なんてね。

グウウウウウウ

「あっ」

思い切り大きな腹の音が響く。そういや朝ごはんも食べないで来たんだっけ。

「ふ、ふふっ」

「わ、笑うなよ」

「ごめんね、ふふっ！」

「(イヤ)ことりいー！」

「きゃー♪」

腹の音を聞いてことりが笑いだした。恥ずかしくはあったが、楽しそうに笑うことりを見てるとこつちまで嬉しくなってくる。

笑い終わってすぐ、ことりがバッグを開け、何かを取り出そうとしていた。

「ことり?」

「えへへ、実は今日、お弁当を持ってきたんですっ」

「え!?!」

「ことりの手作りお弁当ですっ♡」

取り出したのはお弁当箱、しかも中身はことりの手作りらしい。やばい、嬉しくて涙出そう。

「一生懸命作ってみたんだあ」

「ことり、嬉しいよ!」

「えへへ〜! じゃーん!」

「おぉ〜！」

「ことりが開けたその弁当箱には、きれいに盛り付けられたおかずたち、そしてサンドイッチ。

「すげえ、めっちゃうまそうじゃん！」

「そうかなあ、えへへっ。これ全部一哉くんに食べてもらいたくて作ったの」

「え!? これ全部俺に!?!」

「2人分にしては小さめな弁当箱だとは思っていたが、全て俺に食べさせるためだけにもってきてくれたらしい。でもそしたらこたりの分は……?」

「こたりのことは心配しないでいいよっ。一哉くんに食べてもらえればそれで十分だもんっ」

「無いらしい。」

「こ、ことり、本当にいいのか？」

「うんっ！ だから、食べてほしいなあ」

「ありがとうっ、いただきよ！」

「やったっっ」

それでも俺に食べてもらいたいらしいことりは、箸でおかずをつかみ、俺の口元に持ってくる。

「はい、あーん♡」

「っ……あ、あーん」

まるでいつもやっているかのようなノリで、人生初のあーんを経験することに。夢にまで見た光景に心の中で歓喜しながらも、おかずを啜える。

「美味しい！ 美味しいよこれ！」

「そ、そう？ 嬉しいっ」

「こんな美味しいの食べたの初めてだ！」

初めにくれたのは卵焼き。綺麗な黄色に少しだけ焦げ目をつけていて、上手い具合に焼けている。ことりのイメージぴったりの甘めの卵焼きだったが、まさしくそれが俺の好物。甘い卵焼き好きにはたまらなかった。

「えへへ……こと……えき……えへへっ」

卵焼きを味わう横で、ことりは嬉しそうに顔を赤らめ、何やら独り言を言ってるみたいだが、そこまでは聞き取れなかった。

ことりは嬉しそうに次のおかずを箸でつかみ、再び

「あーん♡」

人生二度目のあーんの瞬間を味わせてくれた。やっぱりことりは最高だ。

「あーん……ん!? これもすごく美味しいよことり！」

「えへ、えへへっ」

次にあーんしてくれたのはハンバーグ。いい感じに焼き目の入った美味そうなハンバーグは、やはり美味かった。にしてもこのハンバーグ、今まで食べてきたのと少し違った味がする気がする。隠し味でも入れてくれたんだろうか？まあだとしても聞かないでおこう、せっかくことりが頑張ってくれたんだから、それを聞くのは野暮だろう。

「ことりの——が一哉くんの中に……」

「え？」

「え!? ううん、何でもないの!」

「え? ああ」

またことりが何かを言っていたが聞き取れず。独り言が癖なんだろうか？ 新しい発見だ。

そのあともことりから食べさせてもらいながら、弁当を味わうのだった。



「はあ、美味かったよことり、ごちそうさま」

「はい、お粗末様でしたっ」

ことりは可愛らしく敬礼のポーズをとり、嬉しそうに笑っている。やっぱり可愛いわ、ことり。裁縫出来て料理も出来て可愛くて、言うこと無しだな。

食べ終わった弁当箱と一緒に片付けているとき、ことりが切り出した。

「か、一哉くん」

少しだけ緊張気味なその声に、少しだけ俺も緊張してしまう。

「ど、どうしたんだ？」

「あ、あのね一哉くん……」

赤く染めた頬、そして人差し指をきれいな唇に当て、こう言った。

「ご、ご褒美、ほしいな」

色っぽいその仕草、そして徐々に近づけてくる唇。

え、まってそういうことなのか？ 初めての経験に混乱する俺。ことりのきれいな顔が徐々に近づく。

ことりが目を閉じた。

ことりはそこで、近づけるのをやめた。たぶん、俺からするのを待っている。

”ご褒美”、そうだ、ことりは俺のために頑張ってくれたんだ。なら俺も頑張るしかない。

勇気を振り絞り、俺も徐々にことりの唇へ近づけていく。

少しづつ、少しづつ——

「んっ……」

触れあう。

その感触は、生まれて初めて味わう感覚で、思わず夢うつつになる。現実であることを確かめるため、こたりを抱きしめる。

「ん……っ」

この温かさ、柔らかさ、間違いない現実だ。

そつと、唇を離していく——

「一哉くん……好き」

「ことり、俺も好きだ」

唇こそ離れたものの、身体は抱き合ったままで、互い見つめ合う。

人生初めてのキス、相手はずっと憧れていたことり。嬉しくて、嬉しくて。

永遠に——このまま時が止まってしまえばいいのにと思いながら、俺たち二人は
ずっと抱き合っていた。

帰宅後、南家。

デートを終え、空になった弁当箱を洗いながら、ことりはつぶやく。

「えへへ、喜んでもらえたあ」

「ことりお手製、唾液入り卵焼きと、血液入りハンバーグ」

「美味しいって褒めてもらえた……嬉しいなあ」

「でも、き、キス、してくれるのが分かってたら、唾液入れなくてもよかつたかな。反省
反省」

「また次も、喜んでもらえるように頑張っちゃおうっ」

デート中のつぶやきを、一哉は知らない。

*4 マカロン dangerous

「こどりの家、ここだったよな？」

俺はこどりに招待され、こどりの家の前まで来た。マカロンを焼いたから食べに来て欲しいとのこと。この前はこどりの手作り料理を食べさせてもらったが、めっちゃ美味かったからきつとマカロンも美味いはず。

そう思いつつ、俺は少し緊張気味にベルを鳴らす。何せ女の子の家なんて行くのは初めてだからな。

ピンポン、ガチャツ。ベルの音を鳴らした瞬間にドアが開いた。

「えへへ、待ってたよお」

「ごめん待たせちゃった？」

「ううん！ こつちも今用意できたところだったから、タイミングピッタリ！」

「はは、それはよかった」

「うん！ それじゃあ中にどうぞ！」

「お邪魔します」

ことりに通され中に入ると、さつそく甘い甘い香りが。女の子らしい甘い匂いと、お菓子の甘い香りが混ざってすぐく癒される。まさにことりの家という感じだ。インテリアも女子力の高そうなものが目立っていて、さすがは女の子と言わんばかりの雰囲気、ちよつとだけ俺は緊張する。

ことりに手を引かれ、向かった先は

「ここがことりのお部屋だよ！ 入って入って！」

ことりの部屋だった。中に入ると、ピンクや柔らかい色合いの小物たちばかりが置いてあり、全体的にモフモフしているものが多い。ベッドの上にもフワフワそうな大きめの枕が置いてあり、そこで寝ていれば確かに快眠できそうだと思わせる。全てのものがことりのイメージにマッチしている、といった印象だ。

「えへへ、どうかなあことりのお部屋」

「ことりのイメージに合っていていいな。とても可愛らしい、女の子らしいお部屋だと思

うよ」

「そうかなあ、えへへっ。あ、一哉くん、そこで座って待っててくれる？　ことりはマカロン持ってきますっ♡」

「え？　いや、俺も手伝うよ？」

「いいのいいのっ！　だつて一哉くんがせっかくことりの家まで来てくれたんだもん、今日はことりにお任せ、ですっ！」

「いいのか？　じゃあ、そうさせてもらおうかな」

「うんっ！　じゃあ行ってくるね！」

言うのと、ことりは嬉しそうに笑いながら、マカロンを取りに行つた。

一人、部屋に残された俺は何となく部屋を見渡した。ザ・女の子といった部屋は初めてだから緊張してしまうな。それにしてもすごいな、勉強机の上にも何やら女の子らしいフワフワした何かが置かれているし、今日の前にあるこのテーブルの上にも、モフモフのカバーが付けられたテッシュ箱、そして……あれ？　テッシュ箱の横に置かれている二つの人形に目が行く。

一つはベージュ色の長い髪をした女の子、一発でわかるくらいにクオリティ、間違いなくこれはことりの人形。そして二つ目、黒の短めの髪をした男、まさかこれは――

「ことりと一哉くんだよ！」

「うわあ!?! こ、ことり！ 戻ってきてたのかい？」

「うんっ！ 人形、気づいてくれて嬉しいっ」

「これもしかして、ことりが作ったのかい？」

「うん！ いつでも一緒にいられるように、って思ってた」

「す、すげえな」

二つの人形はことり手作りだったらしい。正直店に並んでもおかしくないほどのクオリティだから驚きを隠せない。

と、気づくと部屋中に甘いお菓子の香りが。

「マカロン、持ってきたから食べて！」

「おぉ〜！」

マカロンを乗せたお皿と、用意してくれた2人分の飲み物がテーブルの上に置かれ

る。一個一個丁寧に作られているのが分かるくらい、綺麗な見た目をしている。中にはクリームが入ってるようで、人形同様、店に並んでいてもまったく引けを取らないほどの出来前。

「ことり、お前って相当すごいよな」

「えっ？ どうしたの急に？」

「人形もマカロンも、正直プロが作ったものと全く変わらないくらいレベル高くてさ、びっくりしてばかりだよ」

「そ、そうかなあ、えへへ」

嬉しそうに笑うことり、それに比べて呆気にとられている俺。つくづく思うが、やっぱり俺みたいな男はことりにはもつたない。だけど、ことりはこうやって俺をもてなそうと全力で、苦勞も手間も惜しまずにやってくれて、俺を好きでいてくれる。俺は幸せ者だな。

おっと、せっかくマカロンを持ってきてくれたんだ、早く食べよう。

「ことり、さっそくだけどマカロン一つ、もらっていい？」

「あつ、うんっ！　じゃあ、はい、あーん♡」

「えつ、あ、あーん……美味しい！」

「ほんと!?!　よかつたあ」

「すごく美味しいよこれ！　料理もすごく美味かつたしマカロンもすごく美味しい……本当
にすごいよことりは！」

「そ、そんなあ、嬉しいよお」

素直に感想を伝えると、ことりは恥ずかしそうに、嬉しそうにしながら赤くなつた顔
を手で隠している。そんな仕草もことりらしくてすごく可愛い。にしてもこのマカロ
ン、本当にすごく美味しい。ことりに食べさせてもらったのもあるのかな、すつごく甘く
て美味い。

つと、少し喉が渴いてきたかも。飲み物もらおうかな。

「ことり、飲み物ももらつていいか？」

「あ、うん、いいよお」

ことりが持つてきてくれた飲み物、ことりはその飲み物が入ったグラスにストローを

さし、俺の口元にそのストローを持ってきてくれる。

「はい、飲んで♡」

「わ、わざわざ飲み物もそんな風に飲ませてくれるのか？」

「うんっ！ 一哉くんに少しでもことりの事好きになってもらいたいし、それに……慣れてるから」

「そ、そうなのか？ じゃあ……ん、この飲み物も美味しいな！」

「—— 飲んじやったね」

「え？ 何か言った？」

「ううん！ その飲み物もことりが作ってみたの」

「ええ!! す、すごいな」

「えへへ」

飲み物もことりの自作らしい、ほどよく甘くて、でも甘すぎないさっぱりとした飲み物、レモネードのような味がする。にしても、ことりの言った“慣れてる”っていうのと、聞き取れなかった言葉、あれは何と言ったんだらうか。

なんて考えていた時だった。

「あれ？」

突然、意識が薄れていく感覚が。

「おやすみ、一哉くん」

「こと……り……？」

感情のない笑みを浮かべることりの胸元に抱きとめられながら、俺の意識は遠のいていった——

「ん……」

頭にはふんわりとした感触。目を覚ますと、なぜか俺は仰向けに寝ていた。どうやらあのあと、ことりがベッドに移してくれたらしい。でもあの笑みはなんだったんだろう。

ガシヤツ。

「え?」

そして今気づいたが、俺の両手首に手錠のようなものがかけられていて、それがベッドの両サイドと繋がれている。足はどうやら固定されてないらしいが、いきなりすぎるこの状態に戸惑いを隠せない。

「ことり!? これはどういうことなんだ!」

怖くなってことりを呼ぶが、返事がない。部屋を見渡してみてもことりの姿はなく、なんとか見えたテーブルの上には、さつきと変わらずマカロンと飲み物が。それ以外に変わったところは特にない。

ガチャツ、ドアが開かれる。

「ことりか？　これはどういう」

「一哉くんっ！」

「うおっ!？」

聞こうとしたが、ことりは走ってこちらへ来ては俺の上に覆いかぶさるように乗っかってきた。飛び込むように、というほどではないが、そこそこ勢いがある状態で乗れたため、思わず情けない声を上げてしまった。

ことりは抱きついたまま、俺の耳元で囁くように言ってきた。

「一哉くんの匂い、一哉くんの肌、一哉くんの温度、一哉くんの息、一哉くんの——」
「ひう!？」

「汗の味……ふわああっ、一哉くん好きっ、大好きっ!!」

匂いを嗅がれたり、首元を触られたり、首元を舐められたり。そんなことが流れるよ
うに行われ、俺は焦る。一体ことりは何をしようとかんなことを……

ことりは興奮した息遣いで、興奮を隠さないまま言葉を連続する。

「一哉くんはことりだけのモノ、ことりだけの……えへっ！ 一哉くんっ、ことりだけを見て？」

今気づいたが、ことりはさっきまでと同じ、感情のない笑みをずっと浮かべていた。ことりだけを見て、の一言と同時に、ぐつと顔を俺の顔に近づけてきた。ことりの息が俺の頬に触れる。

その時だった。

「んっ」

「んんっ!？」

近づけた唇をそのまま、重ねてきた。心の準備もないままだったから、かなり息が苦しい。

「ん……んへへ、二度目のキス、しちやったね」

「ぶはっ！ はあ、はあ、ことり、急にされると、息が……」

「えへへ、でも一哉くんが悪いんだよお？ このまえしたときから全然してくれないだもん」

「そ、それは……」

そう、この前公園デートをしたとき初めてのキスをしたわけだが、それから一週間、俺があまりにも意気地なしなために、ことりからの誘いを断っていたため、まったくことりとキスしていなかったのだ。とはいえ、だ。

「だからって、こんな風に拘束しなくなっちゃっていいじゃないか」

キスするだけなら別に、こんなふうに手首を固定させなくなっちゃっていいのに。

ことりは表情を変えないまま、口を開く。

「一哉くん、ことりは毎日でも一哉くんとキスしたいの、抱き合いたい。でも一哉くんは断ってきたもん。一週間も我慢したのに、だからことりからこうやってしてみたの。手、縛ってないと断られそうだったから……ごめんね」

ことりが言葉を発するたび、少しづつだがこどりの表情に色が戻り始め、言い終わる頃には、悲しそうな表情を浮かべていた。ごめんねと言うことりは既に泣きそうだった。

「ことり」

そんなことりを見てしまったのは、意気地なしのままではいられない。そう思った。だからこそ、こうお願いしてみる。

「手錠、外してくれないか？」

ことりが少し慌てた様子で返事する。

「だ、ダメですっ！ そんなことしたら一哉くんが逃げちゃうもんっ」

「逃げない！ ……というより、ごめんって言いたいのこつちだ」

「……え？」

「ことり、ずっと我慢してきたんだよな、だからこんなふう拘束してまでして俺にキス

してきたんだよな？ だったらそれは俺が悪い。だから、ごめん」

「ち、違う、一哉くんは悪くないの。睡眠薬まで混ぜて無理やり眠らせたのもことり、動けないように、抵抗されないように手を縛ったのもことり、許してもらってないのにキスしちゃったのもことり、全部ことりが悪いんだもんっ！」

やはり、俺は確信した。さつきことりから飲まされたあの飲み物、あれに睡眠薬が含まれていたらしい。普通に考えれば恐ろしいことなのもかもしれないが、俺はそうは思わない。それに、可愛いことりの泣いている姿なんて見たくない。

「……睡眠薬を用意させてまでキスさせたのは俺のせいでしょう？」

「でもー」

「ことりは可愛いよ」

「え……？」

「こんなに一途に俺に尽くしてくれる、普通はここまでできないさ。でもことりは俺が好きだから、そんな風にしてくれるんでしょ？ それに、たとえことりがこういう風に拘束してきたって、少しくらい怖いことされたって、俺はことりから逃げないよ。だって」

「……………」

「俺もことりのこと、大好きだから」

「っ！ 一哉くん……っ、怒ってないの？」

「怒る？ むしろ俺は嬉しいよ？ ことりにここまでされるくらいには好かれてるんだって実感できるから」

「一哉くん……本当に怒ってない？」

「怒ってないよ」

「本当に、逃げない？」

「むしろもつとことりに近づきたい」

「こんなことしちゃう、ことりでも？」

「うん、大好きだ」

「一哉くんっ……大好きっ」

「俺も好きだよ、ことり」

そのあと、手錠を外してくれたことりが泣き出してしまい、結局ことりの泣き顔を見てしまう羽目になってしまった。だけど、これは悲しい涙じゃないから良し。俺はことが泣き止むまで、ずっとことりを優しく抱きしめ続けた。

「涙は止まった？」

「うん、ありがとう一哉くん」

涙が止まったらしく、柔らかい笑みを浮かべながら俺を見てくることり。そんなことりの頭を撫でてみると、ことりは照れているのか、顔を俺の胸に埋め、さらに強く抱きついてきた。

「一哉くんに撫でられるとすごく安心するの」

「そう？」

「うん。あ、あのね一哉くん」

「ん？」

ことりは急に顔をあげ、俺を見る。頬は少し赤く染まっている。

「ことり、今日みたいなことをまた次もやっちゃうかもしれないけど、それもことりを好きでいてくれますか？」

少し不安そうな、恥ずかしそうな、そんな声色でことりは俺にそう言う。だがそんなこと、ことりに聞かれなくとも答えは決まっている。

「もちろん、どんなことりでも俺は好きだよ」

「……ありがとう」

俺が答えると、またことりは俺の胸に顔をうずめた。顔を真っ赤に染めながら。

「ことり」

俺はことりを呼びながら、少しだけことりの身体との感覚を離す。

「キス、もう一度しないか？」

「えっ……?」

「俺が意気地なしだったからことりにばかり頑張らせてしまったけど、今度は俺も、俺からもしたいんだ。ダメかな？」

今までことりに相当我慢をさせてしまっていたらしい、それが分かった俺はもう、意気地なしではいられない。これはその覚悟の証のつもりだ。

ことりは顔を赤くしつつ、目をそらしつつ、胸の前で指を絡ませる。

「か、一哉、くん」

「だめ、かな？」

「う、ううん！ そうじゃなくて、その……実は今日、お母さん帰ってこないの」

「……………え？」

衝撃の事実、確かに家に入ったときことり以外の人は誰もいなかった。

ことりはもじもじしながら、言葉を続ける。

「だ、だからね？ 今日はその……お泊り、してくれない、かな？」

「ことり、それって」

「だから今日は二人きりで——いっぱいしょ？」

その言葉に、意気地なしだった俺の理性はぶっ飛んだ。

「ことりっつ！」

「きゃっつ！ も、もう、これからまだまだ長いのに……♡」

無理やりことりをベッドに押し倒し、ことりの魅惑的なその発言と表情を見ながら、ことりの唇と俺の唇を重ねる。

そして——

チュンチュン、小鳥のさえざりが聞こえる。その声に俺は目を覚ました。カーテンの隙間からは光が差し込んでいいる。身体を横に向けると、そこには可愛らしい寝顔を見せてくれている俺の彼女の、生まれたままの姿が。

「本当に、俺たちは昨日——」

思い出すだけで顔が真っ赤に染まるのが自分でも分かるくらいに顔が熱くなる。意気地なしではいられない、そんな思いもあつてか昨日は恥ずかしさなどなかったものの、いざ思い出すと昨日の自分の勢いはすごかつたんだと我ながらに思ってしまう。

「すう……すう……」

可愛い寝息を立てることを見ながら、俺は再び決心する。

「俺はもう、ことりに我慢なんかさせないからな」

決心とともに、俺は寝ていることりの唇の俺のを重ねた。

「それじゃ、そろそろ帰るよ」

「う、うん。その、また来てね？」

「おう、いろいろありがとうな」

「い、いろいろ……うう」

夕暮れどき、そろそろお母さんが帰ってくるというところで、俺も帰ることにした。ことりは俺のいろいろの言葉に顔を夕日に負けないくらいに染め上げていた。とか思っている俺もまた、そんなことりを見て恥ずかしくなったというのは内緒だ。

あ、そうだ、忘れていたことがあったんだ。

「ことり、ちよつとこつちきてよ」

「え？ どうしたのかず……んん」

「ん……さよならのキス、これならことりも満足してくれるか？」

「か、一哉くん……ダメだよお、こんなんじやことりダメになっちゃう……」

「はは、ごめんごめん。じゃあ、また明日な」

「は、はいっ、また明日です」

さよならのキス、ことりはいつも帰り際にこれを求めてきていた。けどもう、前までの俺とは違うんだ。ことりに我慢はさせない、そう決めたんだ。

手を振ることりに手を振り返しながら、俺は帰路を歩き始めたのだった。

「あれ？ ポケットに入れてたはずのハンカチがない？ ことりの家に忘れてきたのかな……まあ、明日返してもらえばいいかな」

皆月一哉と別れたあと、南ことりの部屋では。

「はあああつ♡ 一哉くんが好きすぎるよおつ♡ そして、このハンカチも……はあ、はあ、えへへ、一哉くんの匂いがいっぱい。でもそれだけじゃなくて、もつとすごいのが……」

南ことりはハンカチを持ちながら、ベッドへ飛び込む。

「一哉くんの匂いがいっぱいだあ♡ そして、一哉くんとやつと一つに……嬉しいよお」
 ベッドに染み付いた匂いを興奮気味に嗅いでいる南ことりは、テーブルに置かれた人形を手にする。

「えへへ、一哉くんの人形さんにいっぱい匂いつければ、本物の一哉くんにちよつとだけ近づくよね……これで一哉くと離れる時の寂しさが少しだけ紛らわせるよね」

そう言いながら南ことりは、人形をベッドにこすりつける。
皆月一哉
 彼に見せていた感情のない笑みを浮かべながら。

*5 変化 calm

爽やかな風が吹き抜ける朝、俺はいつものように学校に行く準備をして、家を出る。向かう場所は学校ではない。小走り気味に足を速め、いつもの待ち合わせ場所に向かう。

歩き始めてからおよそ5分、いつもの場所にはいつものように一人、立っている女の子が。

「おはよう、一哉くんっ」

南ことりは、俺の彼女だ。

変化 calm

「おはようことり、待たせちゃったかい？」

学校に向かう前に、俺は毎朝ことりの家の前まで迎えに行っている。今日もことりはいつものように家の前で待っていた。それにしても毎朝毎朝思うのだが、ことりはいつでも俺が来る前から待っている。今日くらいは俺が先に着いてことりが出てくるのを待っていかよかと思つて急いで集合10分前に着くように家を出たはずだったのにも関わらず、ことりは今日もすでに待っていた。

俺はそれを不思議に思い、どれくらい前から待っていたのかを探るのも兼ねて、いつもとは違った言葉でことりに声をかけた。いつもなら待たせてごめんと言うのだが、するとことりからはいつものように柔らかい声で返事が返ってきた。

「待つてないよお。それに一哉くん、まだ時間まで10分もあるよ？」

「とか言ってることりは、10分早く来た俺より早く外で待ってたじゃん」

「それはその、少しでも早く、あ、会いたかったから、です」

「ははっ、照れてるのか?」

「っ! うう、今日の一哉くん意地悪ですっ」

俺の欲しい答えとは違ったものの、俺の求めていた可愛さがあったため、しつこく聞くのはやめておいた。照れていることに少し意地悪な言葉をかけてみるが、本当は俺のほうが照れてるくらいだ。照れ隠しであることを悟られないために、俺はこつりに謝罪する。

「ごめんごめん、あまりにこつりが可愛かったからつい」

「も、もうっ! 意地悪な一哉くんにはもうしてあげませんっ!」

「ええっ!? そ、それは嫌だなあ」

「……嘘ですっ♡」

「なっ!? この小悪魔め」

「えへへっ、一哉くんが意地悪するのがいけないんですっ♡ そ、それで、その……

いつもの、欲しいな」

「つたく……………これでどう?」

「ん…………えへへっ、満足ですっ」

ことりに反撃されてしまったが、俺たちは毎朝のようにしているキスいつもを交わす。この前ことりの家に行ったときにことりと愛し合って以来、毎朝毎夕、キスを交わすようになった。幸いこの周りには人気ひとけが少なく、誰かに見られてしまうといった心配はない。ことりはスクールアイドル、もしファンの人に見られようものならことりに何かあつてもおかしくはない。警戒するに越したことはない。まあ、男と一緒にいるというだけでもまずいのだろうが、そこはことりが離れることを許してくれないため、止むなしだ。

キスに満足してくれたらしいことりは上機嫌で俺の腕に抱きつく。

「ことり、今日も頑張れちやいそうっ」

「俺も、ことりのおかげで頑張れそうだよ」

「今日も一緒に頑張ろうねっ! あ、そうそう、昨日のテレビ見た?」

「ああ、あれでしょ? あの芸能人が出てた——」

とりとめのない話をしながら俺たちは、人気ひとけのない道をべったりくつつきながら歩

き、学校へと向かった。



「ねえ一哉くんっ、今日も一緒に弁当食べよっ？ 作ってきたのお」

「おお、ことりの手作り弁当美味いんだよなあ。ありがとうな」

「うんっ！」

学校の中でも俺たちはずっとくっついてる。流石にことりも学校の中では腕に抱きついてきたりはしないが、手は繋いでいる。手を繋いで歩いている俺たちを周りの生徒たちはやはりとすべきか、驚きの表情で見てる。その驚きは学校内ですら手を繋いでいるということに対してなのか、学校全体でも評判の良いことりと手を繋いでいる俺に対してなのかは、わからない。

クラスの中ではもう見慣れた光景らしく、特に何か言われたり、驚きの目で見られたりはしていない。

こいつら以外には。

「うわあことりちゃん！ それつて恋人繋ぎつてやつだよね！ いいないないなく！ 穂乃果も彼氏さんとそんなことしたーいつ!!」

「なっとななっ!!? またあなたたちはそんなことをしているのですか!?! 破廉恥ですっ
!」

「ええ〜? 破廉恥じゃないよお?」

高坂と園田、未だにこの二人からはずつとこういうことを言われ続けている。これでもうかれこれ何回目だろうか、正直聞き飽きた感すらある。しかしことりは毎回、それらに対して嬉しそうな笑顔を浮かべながら二人に答える。しかしここでもことりの小悪魔的思想というのが働いているのか、わーわー言ってくる二人に笑顔で対応しては、その度に、まるで見せびらかすかのように繋いでいる手を二人に見える位置に持つてくる。

「きやーっ! 穂乃果憧れちゃううっ」

「な、な、ああつ……!」

それを見て、高坂は羨ましげな表情で俺たち二人を見てくるし、園田は顔を真っ赤にして言葉を失う。このやりとりは一体何度目なんだろうかと思うほどに全く同じリアクションを見せてくる二人を見て、ことりは嬉しそうに笑う。

そして俺はこの光景を見てはいつも思い出す、この二人に俺たちが付き合うことを報告して、二人を見て笑ったとき、ことりが見せた感情のない目。あの恐怖を思い出してしまふから、いつもこの二人の前で笑うことができないうた。今日も今日とて、二人に何かしら声をかけてしまったら、またあの目で見られるのではという恐怖に駆られてしまふ。

そんな俺の気持ちをよそに、高坂は俺の空いている方の手を取ってきて、こう言った。

「ねえねえことりちゃん！　ちよつとだけ、ちよーつとだけ、皆月さんと手繋いでみてもいいかな!？」

「ひいっ……!!？」

高坂のそんな発言に俺は思わず上擦った声で小さな悲鳴をあげる。心なしか、ことりの手を繋ぐ力が強くなった気がしたため、恐る恐ることりの様子を伺う。

「……………」

何も言わず、たださつきまで浮かべていた笑みはそのままに、高坂を見つめ続けている。高坂は変わらず期待の眼差しをことりに向け続けているが、俺にはわかる。これはまずい、と。そんな雰囲気を感じたのか、園田が口を開いた。

「あ、あの穂乃果、さすがにそれはことりにも皆月くんにも悪いですし……」

「え〜？ いいじゃんいいじゃん！ ことりちゃんばっかりずるいよお!!」

「し、しかし……」

俺たちを気遣って園田が高坂を説得しようとするも、高坂は気にもしないで駄々をこねる。ことりのただならぬ雰囲気を感じているらしい園田はそんな穂乃果をどうにか収めようとしているのがわかる。俺もどうにかことりを抑えようとは思っているのだが、繋がれている手、ただただ笑みを浮かべているだけのことりからのプレッシャーに、口を開くことができない。

だが、意外にもそのプレッシャーはあっさりと消えてしまった。

他でもない、ことり自身の発言によって。

「うん、いいよっ」

笑みはそのままに、俺の手から離れることりの手。温もりがなくなることりに少しだけ寂しさを覚えたが、それ以上にことりからそんな言葉が出るとは思っていなかったという予想外の展開に驚く。園田も驚いているようで、言葉を失っている。

「やったっ、よーしっ！ それじゃ皆月くん、失礼しますっ！」

「うおっ!!」 ちよ、ちよつとまで」

「うわー、皆月くんの手、おつきくてあつたかいねー!!」

「あ、あはは……」

ことりの言葉を聞き、待つてましたと言わんばかりの勢いで俺の手を掴んできては、俺の横に立つて手を繋いできた。いつもはそこにことりがいるはずなのに、と思いがながらも高坂の言葉にとりあえず笑って返す。高坂は目をキラキラさせながら話してくる

が、俺はいつことりに恐怖を味わわせられるかの恐怖に怯えているのだ、とてもじゃないがリアクションなんてとってられない。

「ねえねえことりちゃん！ 穂乃果たちどう？ お似合いかなあ？」

「なあっ!？」

「ちよつ、穂乃果あ!？」

「……………」

またしても高坂が爆弾を投げつける。俺と園田は驚き怯え、ことりはさつきまでと変わらぬ笑みを浮かべ続ける。

何秒たったのかすらもわからないプレッシャーの中、またしてもそのプレッシャーを破ったのはことりだった。

「うーん、悔しいけどお似合いかもつ。でも穂乃果ちゃん、一哉くんはことりのなんだから、とつちやダメっ！」

……何が起こっているのだろうか。ことりは、高坂から何を言われてもあの感情のな

い目を出すことなく、いつものような雰囲気が高坂に返事をしている。ことりは至って冷静だ。そんなことに驚きつつも、俺はことりの言葉に慌てて言葉を続ける。

「そ、そうだぞ高坂、俺はことりと付き合ってるんだから。俺はことりのものなの」「ちえつ、ことりちゃんと皆月くんのけちんぼ！」

「あ、あはは」

「ごめんね穂乃果ちゃん、でも一哉くんはことりのだからいくら穂乃果ちゃんでもあげませんっ！」

高坂は俺の発言に頬を膨らませ、俺から手を離れた。その瞬間を見計らっていたのか、ことがすぐさま俺の手を取り、指を絡めてきた。高坂もそれを見てか、渋々といった感じで少し俺と距離をとった。園田はその様子を見てホッと胸を撫で下ろしていた。

「海未ちゃんにも、もちろんあげませんっ」

しかし、そんな園田にも流れ弾が。園田はそれに慌てたように返事をする。

「へっ? ……わっ私にはいりませんそんな人っ!!」

「そ、そんな人って」

「海未ちゃんひどい! 一哉くんはことりの彼氏さんなんだよつ、そんな人なんかじゃないもんっ」

「ええっ!?! あ、いやそういうことではなくて!」

慌てて答えたせいなのか、それとも本心なのか、俺のことをそんな人とまで呼んできたことに俺は少しだけ胸を痛めた。ことが必死にフォローしてくれるが、園田が慌てるのを見て何とも言えない気持ちになってしまった。



「はい、あーん」

「あーん………美味い!」

「えへへえ、もつと食べて食べてっ」

「おう、いただくよ」

さつきまでの騒動を終え、俺たちは屋上でことり手作り弁当を味わっていた。さつきまでの騒がしき、プレッシャーから一転、俺たち二人以外誰もいないこの静かで開放的な空間でことりと二人きり。ここ最近はいつものようやって、学校でも二人きりの時間を楽しんでいる。

「それじゃあね……卵焼き！ はい、あーん♡」

「あーん……」

「あむっ、もぐもぐ」

「えっ？ こ、ことりい！ 俺にくれるんじゃないのかよお！」

ことりがあーんしてくれている卵焼き、それを口に入れようとしたとき、ことりは持っていた箸を俺の口ではなく、ことりの口に持っていき、そして食べた。ことりが作る卵焼きはすごく美味しいから楽しみにしていたのだが……でも仕方ない、何せことが作ってくれた、二人分の弁当なのだから。ことりが食べてもまったく不思議ではない。

卵焼きをもらえなかったことに少し無念を感じていると、ことりは口を動かすのをやめ、こちらに目をつぶりつつ顔を近づけてくる。

「ん……んはあ、ん」

「んっ!!? ん、んんあ」

「はあ、はあ……えへへ、口移し、ですっ!」

「ゴクツ……ははっ、びっくりしたよ。でも、いつも以上に甘くて美味しかったよ」

「それならよかった、また次もしてあげるね!」

「楽しみにしてるよ、ことり」

「うんっ! じゃあ、次はこれ! はい、あーん♡」

「あーん——」

このあとも時間の許す限り、俺たちは二人きりの屋上で二人きりの時間を過ごした。最近、というよりこどりの家に行つて以来、ことりは俺が高坂や園田と話していても何も言わず、ただただ笑ってくれるようになったというのは気のせいだろうか。心に余裕でもできたのだろうか。

何にせよ、こんな風に何事もなくことりと二人きりで一緒にいられるこの時間がずつ

と続けばいいのに。

吹き抜ける爽やかな風を浴びながら、そんなことを思った。

*SP. 1 ことり chocolate

「行つてきますー！」

朝、俺はいつもより少しだけ早く家を出た。

今日はバレンタインデー。外国では違うらしいが、日本では女の子が男にチョコをあげる日。義理チョコ友達チョコ、色々種類はあるらしいが、主流なのは好きな男へ贈る”本命チョコ”だろう。

去年まで俺にはあまり興味のないイベントだったが、今年は違う。去年の俺にはなくて、今年の俺にはあるもの、それは……

「ことり!!」

ことり
彼女の存在だ。

意気揚々と、明るい足取りでことりの家まで駆けてきてみたものの、そこには、制服を着て待っている女の子の姿はなく

「ゴホッ、ゴホッ……うう」

明らかに体調の悪そうな、青ざめた顔をした病人の姿があつた。

バレンタイン記念回

ことり chocolate

「ことり!？」

この寒空の下、肩にブランケットを羽織って震えていることりの姿を見た俺は、ことりの元へ慌てて駆け寄る。

「うう、ごめんね一哉くん。ことり、今日熱出しちゃったみたいで……ゴホッ」

「熱って……だったら真冬の寒い朝に、外で待ってちやダメだろ!? 熱は!? どれくらいなんだ!？」

「今朝測ってみたたら、38度5分だったの」

「さ、38度って高熱じゃないか! と、とりあえず家の中に入ろう! 風邪が悪化したらどうするんだ!」

「ごめんね、ゴホッ、ゴホッ」

「謝らなくていいから！ だって俺ことりの彼氏でしょ、ことりの面倒見るくらい当たり前だろ!」

「か、一哉くん……ありがとう」

ありがとう、そう言ったことりの顔に映る笑顔はいつもより弱々しくて、それだけで体調の悪さが伺えるほどだった。そんなことりを、俺はことりに肩を貸す形で歩き家の中に入ろうとしたのだが、ことりの足はガタガタと震え、さつきまで家の前で立って待っていたのが不思議なほど。とてもじゃないが、肩を貸しているだけじゃまともに歩けなかった。

だからなのか、俺の身体は勝手に動いた。

「ほら」

「えっ?」

「ほら早くしろ、寒いだろ?」

「……ごめんね」

「いいんだよこれくらい。よっと、ちよっとの間だけ我慢してろよ?」

「うんっ」

膝を曲げ、ことりに俺の背中に乗るよう合図する。要はおんぶだ。ごめんねと申し訳なさそうに、弱々しく謝ることりを急かし、ことりを背中に乗せ、歩き出す。柔らかな

その身体からは、熱のせいなのか、激しく脈を打うっているのが伝わる。俺はその脈を感じながら、できるだけことりを揺らさないように、かつ急ぎ目にことりの部屋へ向かった。

「大丈夫か、ことり？」

「はあ、はあ」

「息が荒い……まさかさつき外で待つてたからまた熱が上がったんじゃ」

「だい、じょうぶだよ……一哉くん」

「無理して喋らなくていい！ 何も言わなくて大丈夫だから」

「学校、遅れちゃうよお……？」

「そんなものいい！ 俺もことりと一緒に休むから！」

「だめだよお、学校、行かなきゃ」

ことりの部屋につき、ことりをベッドに寝かせ布団を被せたまではよかったが、外で待つてくれていたのが悪かったらしく、ことりの息が切れ切れになるほどに熱が上がってしまったようだ。しかしことりは、一緒に休もうとしていた俺に学校へ行くよう言うてきた。しかしその声も今にも消えそうなほど。

「何言つてんだ、そんなに弱ったことりを一人にできるわけないだろ！」

「で、でもお」

そんな状態であるにも関わらず、ことりは俺の言葉を否定する。いつものことりなら、むしろ学校へなんて行かせないような言い方や行動を取るだろうに。風邪で弱っているからだろうか？

と思つたが、何か言いたげにしていることりを見てそうでないことに気づく。

「今日は、バレンタインだもん。きつと、一哉くんはチョコ、たくさんもらえるよ」

何かと思えばそんなことだった。確かに今朝は俺も期待していた、でもそれはあくまでことりから貰えることを、だ。そのことりがこんなにも苦しんでいるというのに、自分だけバレンタインを楽しむもうだなんてとてもじゃないが思えない。

「そんなことより俺はことりのことが心配なんだよ！」

「そんなことつて言っちゃダメえっ！ ツゴホツ、ゴホゴホツ」

「っ!? こ、ことり、大声出すんじゃない！ 俺が悪かったから」

「はあ、はあ……」

俺の言葉に珍しくもことりは大きな声で俺を叱ってきた。咳き込んで苦しみながらも、その表情には少しだけ怒りの色も見える。

「ダメだよお……今日は、女の子にとって大事な日だから」

「で、でもことりが苦しんでいるのに」

「それに、ことりも一哉くんのためのチョコ、作らなきゃ」

「えっ!? ダメなことり、今日は安静に!」

ことりが言いながら身体を起こしてきたため俺は慌ててことりを止める。しかし今日のことりは、なぜここまで……

「一哉くんお願い、ことりは一人で大丈夫だから」

俺を束縛しないだろう。

「ええっ!? ことりちゃん風邪引いちゃったの!」

「うるさいです穂乃果! それは私も驚きましたが穂乃果は驚きすぎです!」

「ええく? だってだって! ことりちゃんが風邪引くなんて!!」

学校でことりが休みだということを知った高坂は大騒ぎ。園田も園田で、高坂にうるさいと言っていないながらも結構大きな声をだして驚いている。でもそれも仕方のないことで、ことりが風邪を引いて休んだなんて少なくとも俺がことりと出会ってからは1度たりともなかった。2人の反応を見るに、たぶんそれ以上の期間ことりが風邪を引いたことなんてないのだろう。

2人は驚いた様子はそのままに、俺にちよつと遠ざかり、何かを話しだした。

「ちよつと、2人とも何を話してるの?」

俺は、2人が俺だけを除け者にして話すようなその振る舞いにショックを受けつつ、2人が何を話しているのかを聞いた。すると2人はチラリと俺を見ては、2人見つめ合い頷き、再び俺の方を向く。

「一哉くん!」

「今日は何の日ですか?」

「えっ?」

ほんのり頬を染める2人に聞かれ、俺は何のことか一瞬分からず考える。今日、今日は2月の14日……あつ。

俺は今朝のことりとこのやりとりを思い出した。

『ダメだよお……今日は、女の子にとって大事な日だから』

『それに、ことりも一哉くんのためのチョコ、作らなきゃ』

『今日は——』

「バレンタイン……」

「正解、だねっ」

「ということですよ。ですから私たちからも」

「はい一哉くん、いつも穂乃果たちと一緒にいてくれてありがとうございますっ！」

「ことりがいない間に、なんて、少し厚かましいかもしれませんが、気持ちだけでも思っています」

2人から手渡されたのは、袋に入ったチョコが高坂と園田からそれぞれ1つずつ。高坂は笑顔で、園田は顔を赤らめながら恥ずかしそうに。俺はその2つを受け取った。

「2人とも……わざわざありがとう、嬉しいよ」

「えへへ」

「……やっぱり、こういうのは恥ずかしいものですね」

「でも残念だなあ」

「残念？ どうして？」

「実は、ことりちゃんと3人で一緒に一哉くんにもチョコを渡そうって話してたんだよ！」
 「ですがことりは風邪をひいてしまったので……」

「……………」

ことりが今朝、俺を少し強引めに学校へ向かわせた理由、これが理由だったのか。高坂と園田の2人のおかげで、今朝のことりの様子がいつもと違った理由が分かった。

『だめだよお、学校、行かなきゃ』

ことりのあの言葉はきつと、高坂と園田が今日、俺にチョコを渡せるようにああ言っただ。ことりは優しい女の子、でも同時にすごく寂しがり屋な女の子。寂しいのを我慢して、高坂たちが予定通りにチョコを渡せるように俺を学校へ……それを考えただけで、俺はことりが恋しくなってしまった。

しかし、俺はまだ気づいていなかった。2人が俺にチョコを渡したところを、クラスの人から見られていたことに。

「えっ!? 穂乃果と海未ちゃんが一哉くんにもチョコ渡したよ!?!」

「あつ、そっか! 今日のことりちゃんが風邪で休み、つてことはこれってチャンス!?!」

「一哉くんーっ、私のチョコ食べてーっ!!」

「あつ、ずるい! 私のも!!」

「私も!」

「えっ、あ、ああっ!？」

近くにいた人たちが俺の元に集まってきてそれぞれがチョコを差し出してきた。こ音ノ木坂は共学化したとはいえ男子生徒はほぼゼロに等しい。その証拠に、俺たちのクラスには俺以外の男は存在しない。だからなのか、クラスの人たちはやたらと俺にお菓子をくれたりしてくれている。去年のバレンタインもみんなからチョコをもらった。しかし去年から俺はことりと付き合いだした。それをみんなも知っていて、かつことりがずつと俺のそばにいるからだろう、いつもお菓子をくれていた人たちも俺たちから少し距離を置いていた。

だが、今日はそのことりがいない。

俺は高坂と園田の哀れむ目を見ながらも、クラスの人たちからポンポンと口の中にチョコレートを放り込まれ、あまりの甘さに喉が焼けるのをただただ必死に耐えるのであった。



キーンコーンカーンコーン。

俺は1日の終了の鐘の音を聞いてすぐ、ことりの家へと走った。本当は途中で早退で

もしようかと思っていたのだが、ことりから『学校サボっちゃダメだよ』のメッセージを受け取ってしまっていたため、こうして1日きっちり学校で授業を受けた上でことりの家へ向かっているのだ。

ことりの家が近づくたび、今朝震えながら外で待っていたことりの姿、部屋で、休もうとする俺を必死に学校へ行かせようとしていたことりの辛そうな顔が浮かんでくる。浮かぶたび、俺はさらに急ぐ。

「ことりー」

今の俺には、ことりしか見えていない。

「はあ、はあ」

全力疾走でことりの家のドアの前まで来ることができたが、久しぶりに全力で走ったためか思った以上に疲れてしまい、思わず膝をつき息継ぎを繰り返す。

「よし」

ある程度落ち着いたところで、俺は家のベルを鳴らす。

ピンポン、ピコーン。

ベルの音とほぼ同時にメッセージアプリの通知音。スマホを取り出し確認すると、ことりからだった。

『ドアの鍵開けてるから、そのままことりの部屋まで来て』

ベルを鳴らす前から、今このタイミングで俺が来ることを分かっていたような内容に少し驚きつつも、俺は言われたとおりドアを開け、靴を脱ぎ、そのままことりの部屋へと向かった。

コンコン。

「ことり、入るよ」

一応ノックして確認し、部屋のドアを開けた。

「ことり、体調はどうだ——」

俺はベッドの上にいるはずのことりに向かって声をかけた。

しかし、ベッドの上のことりはいなかった。

「ことり!?!」

驚きで思わず声を上げてしまった。

その時だった。

「うわっ!?!」

何かから強く押され、バランスを崩した俺は思わず倒れこむ。そして倒れた俺の背中にずしりと重く、そして感じたことのある柔らかい感触が。

「一哉くん……はあ、はあ」

「ことりー！」

分かつてはいたが、それはことりだった。はあはあと荒い息を吐きながらも俺を逃すまいと必死に抱きついてくる。その身体からはまだ、通常のものではない温度を感じる。

「ことり、まだお前熱下がつてないんだろ?! 寝てなきやダメだろ！」

しかしことりは俺の言葉など聞いちゃいまいと言わんばかりに、俺の身体を仰向けにするため強引に俺の身体を転がすように反転させ、仰向けになった俺の上に馬乗りになる。

「いっぱいチョコの匂いするね……これって穂乃果ちゃんと海未ちゃんの分だけじゃないよね、一哉くん？」

「あ、ああ。実はクラスメイトから無理やり食べさせられてさ」

「ふふつ、やつぱり一哉くんはモテモテなんだあ」

熱で赤らんだその顔をさらに少し赤くさせながら、両頬に手を当て、うつとり顔で俺を見ることり。いつもの”怖い”と思わせる雰囲気は今のところ感じないが、それでも俺には、「ああ、いつもどおりのことりだ」と安心するには十分なほどだった。

ことりの口から名前が出たのをきっかけに、俺はことりに高坂たちの件を聞く。

「ことり、今日本当は高坂たちと3人で俺にチョコをくれる予定だったんだってな？」

「うん、でも熱出しちゃった。ごめんね一哉くん」

「いや、それは仕方ない「だからね一哉くん！」っ!!」

仕方ないさ、そう言おうとした俺にことりは、急に顔をぶつかるほど近づけてきた。少しでも動けばことりのその柔らかかそうな唇に触れてしまいそうなほど、それほどに顔を近づけてきたことりは、そのまま俺の目を見つめる。

「だから一哉くん」

はあはあと、荒い息はそのままに。その声色が艶つぽくなつていく。

「チヨコじゃなくて、ことりを食べて……?」

「ことり……」

その声、その表情。その全てに魅了されてしまった俺は、ことりの求めるがままに、風邪を引いていることすら忘れて。

2人でそのまま、愛し合った

* 6 勉強会 jealousy

「うわあんどどうしよお！」

昼休み、俺が席で本を読んでいた時だった。高坂が頭を抱えながら、教室全体に響くほどの大きな声を出していた。

「だから毎日復習をこつこつやれとあれほど言っていたのに！」

「穂乃果は海未ちゃんと違ってたくさんやることあるから忙しくてそれどころじゃないのー！」

「……ほお？」

「う、嘘だよ海未ちゃん」

高坂の一言に表情が変わった園田、それに気づいた高坂が慌てて訂正する。そんなやりとりも今日で何度目だろうか。

しかしながら今はことりが保健委員の仕事のため、教室にいない、誰も止められる人がいない。

「穂乃果……穂乃果が遊んでいる間に私がどれだけ苦労していると思っっているのですか？」

「ひっ!？」

「作詞にダンスの練習に歌の練習、それに加えて学校で習ったことの復習……」

「う、海未ちゃん落ち着いて!」

徐々に園田がヒートアップしていくのが分かる。周りにいるやつらに恐れられるほどに声色が変わっていく園田を、軽く涙を浮かべながら何とか園田を抑えようとしている高坂。

「ことりがないときはいつもこんなだから、特に気にすることはないだろう、そう思つて俺は再び本を読み始めた。」

しかしそれはまた中断されることになった。

「助けてよお皆月くんっ」

「うおっ!？」

高坂の涙目アタックを食らい、体勢を崩された俺。椅子から落ちるまではなかったが、読んでいた本はストンと地面に落ちてしまった。

「ことりちゃんがないから誰も海未ちゃんを止められないんだよお!」

「いや高坂が悪いんだから仕方ないじゃん」

「うー! 皆月くんまで!」

落ちた本を拾いつつ答えると、高坂はご立腹と言わんばかりにジタバタしていた。

しかし俺は気づいていた、ジタバタしている高坂の後ろには

「ほーのーかー……」

「ひいっ!？」

鬼の形相とはこれのことを言うのだろうと言わんばかりの表情を浮かべた園田が立っていたことを。高坂が気づいた時にはもう遅く、園田は高坂の真後ろに立ち、仁王立ち。その姿はまさに鬼。

「今日という今日は許しませんよ、穂乃果?」

「うっ!? み、皆月くん助けてえ!」

泣きついてくる高坂に迫る園田、ことりの苦勞が伺える。しかし今はそのことりがいい以上、ことりの代わりになるのが俺しかない。

周りの目も気になるから、仕方なく園田に声をかける。

「園田、その辺にしときなよ」

「え? ……ああ、皆月くん。いたんですか」

「今更かよ! ほら、もうちよいで昼休みも終わるからさ」

「そう、ですね。この続きは後にしましょう」

「やったー! 皆月くんありが」

「た・だ・し、後で覚悟しておいてくださいいね、穂乃果?」

「うわーん！ やっぱり皆月くんじゃダメだったよお」

「頼つておいてそれか!？」

ことりの代わりを担おうと頑張った俺に対して辛辣な言葉を投げてきた高坂、俺は思わずガツカリしてしまった。しかしこの場は何とかなつたようで、園田は高坂に軽い笑みを送つたあと自らの席へ、高坂もまた、肩を落としたまま重い足取りで席へと戻つていった。

「あー、きつっつ」

思わず呟いた。ことりはいつもあんな二人の仲裁に入つてゐるっていうのか。天使にも程がある。

そんなことを思いつつ時間を確認すると、あと五分余裕があることに気がついた。俺はその時間を使って、再び本を読もうと、読みかけの本を開いた。いい所である二人に邪魔されてしまったから続きが気になるんだ。

……ことりは、まだ保健委員の仕事をやつてゐるのだろうか。もうそろそろ帰つてきてもいいはずなのに。

気になって、ことりの席の方へ顔を向けようとした時だった。

「ハイハイはハイハイさるよ」

真後ろ、聞き慣れた声で俺にそう告げた。

「ことり、帰ってきてたんだな」

平然を装ってことりの方へ身体を向けたが、内心驚きのあまり手汗をかいてしまった。

それもそのはずで、ほんの数秒前まで後ろはいなかったのを確認した上で本を開いたのにも関わらず、真後ろから声をかけられたのだから。

「うん。帰ってきたよ」

「……………ことり?」

驚きを必死に隠そうとしている俺に、ことりはほんのり笑みを浮かべている。しかしその表情に疑問を感じた。

目が笑っていないんだ。

「保健委員のお仕事疲れちゃったあ」

「え? あ、ああ、お疲れことり」

「えへへっ、だからことりにご褒美くださいっ」

「えっ!!? ちよつと待て!」

「ご褒美、そう言うところりは目を閉じ、こちらに顔を近づけてきた。これは明らかに

キスを狙っている、そんなことはわかつてはいるのだがここは教室。みんなが居る前で見せびらかすようにキスするだなんて勇氣は俺にはない。

「こ、ことりそういうのはみんながない前で！ なっ!?」

俺は慌ててことりを説得する。しかしさっきの目、おそらくことりは俺の言うことなんか全く聞いていないだろう――

「……けちっ」

「え？」

予想外の反応だった。ことりは、俺の言葉を聞くなり顔を離し、少し頬を染め、俺から目を背けた。

強引に来るものだとばかり思っていたがために、動揺を隠せない。がしかし、同時にそんなことりが愛おしくてたまらなくなつた。

だから俺は

「帰ったら、な？」

それだけ告げて、照れ隠しに再び本を読むふりをした。

「わあ！ うんっ、約束だよっ♡」

恥ずかしくて顔を見ることはできなかつたが、そう言ったことりはきつと、俺に可愛い笑顔を見せてくれるのだろう、そんな気がした。

キーンコーンコーンコーン……

授業開始の鐘が鳴った。



放課後、席を立とうとした俺のところに高坂が駆け寄ってきた。

「ねえねえ皆月くん！ ちょっといいかな!？」

すぐ顔近づけてきた高坂は、何かを期待する目で俺を見てきた。

その目を見て、何やらものすごく面倒なことになりそうな気がして

「いや、俺は今日ちょっと」

「海末ちゃん！ ことりちゃん！ 皆月くんが今日穂乃果に勉強教えてくれるっ

てー!!」

断ろうとした俺の意見など聞かず、俺が高坂に勉強を教えることになってしまったらしい。それはたぶんすごく面倒くさいことになるから次こそ断ろうとして

「おい待て高坂、俺はまだ何も」

「今から穂乃果の家で勉強会だよっ！ 海末ちゃんことりちゃん!」

「聞けやああ!!!」

高坂に言おうとしたその言葉を遮られてしまった。しかも今から高坂の家で四人で勉強することになるらしい。ほんと高坂は強引だ。

高坂の声を聞いたことりと園田が俺たちのところに来た。園田は呆れ顔で、ことりは
——柔らかな笑みを浮かべていた。

「はあ。穂乃果、本当に皆月くんに許可を取ったのですか？」

「うんっ！ だよね皆月くん!」

「あー……ああ、もういいよそれで」

「ねっ!? 穂乃果ちゃんと許可取ったんだよ!」

胸を張って自慢げに話す高坂、俺はがくりと肩を落としその様子を見ていた。園田もまた、呆れ顔で高坂を見ていた。

ことりは——

「……………」

ただただ無言で、柔らかな笑みを浮かべたまま俺を見ていた。

何かを言いたげのような、ただ俺を見ているだけのような、何も読めないことりの笑み。

あれ？

俺、もしかして何かを忘れてる……？



「うわーんわかんないよお！」

「だから！ ここをこうやってってさつきから教えてるじゃないですか！」

「助けて皆月くーんっ！」

高坂の部屋で高坂の勉強を見ていた俺たち。教えるのは園田で、俺とことりはその様子を伺うだけだったのだが、園田に教えてもらってもなお分からないと言う穂乃果は、俺に泣きついてきた。

教科は数学、高坂が毎回のように赤点をたたき出している教科だけに、普通に教えただけじゃ理解できないらしい。俺にしがみつくように抱きつく高坂をどけつつも、俺は小学生に教えてるかのような丁寧さで高坂に教える。

「いいか〜？ こっちはこうやって……」

「うんうん」

「ここをこうしてな？」

「うん」

「こうするんだぞ？ わかったか？」

「うんっ、わかったよ！ やっぱり皆月くんはすごいや！」

理解してくれたらしい。やってることは園田のと全く変わらないのだが、言い方を変えただけで理解できたらしい。ようは高坂の頭は小学生並ということだな。

「えへへっ、できたよお」

「よく頑張ったな」

「うんっ！ だから撫でてください！」

「おう、えらいぞ」

「えへへえ……♡」

「穂乃果、あなたは小学生ですか」

「くうくん♡」

「いや、高坂は犬だな」

「犬ですね」

「わんっ！」

完全に高坂を小学生扱いしている俺は、高坂の言うままに頭を撫でた。だが驚くことに高坂は小学生ではなく犬だった、人間ですらなかつたのだ。

そんなやり取りをしてた俺たちだったが、完全に高坂のペースに乗せられていた俺は、横に座っていることりの存在をすっかり忘れていた。高坂に乗せられて頭を撫でてしまったが、ことりがこんなのを見てしまったら一体どうなることか分からない。怖くて仕方ないが、ここで放置してしまうことのほうがもつと怖いから、恐る恐る横に居ることりの方へ顔を向けた。

「……………」

完全なる沈黙、そして変わらないの笑み。何を考えているのかが全くわからないことに、俺は恐怖する。

だが不思議なことに、このことりからは怖さは感じず、むしろどちらかというところ悲しそう、そう思わせるような雰囲気すら感じた。

このあともことりは、一言も離さず笑みも崩さず、この勉強会を過ごしていた。



高坂家からの帰り道、高坂家で終始無言を貫き通していたことりだったが、二人きりの帰り道すらも一言も話さないことり。俺はそんなことりが気になって、少し重い空気を断ち切り口を開く。

「なあ、ことり。何か——」

何かあったのか、そう聞こうとしたその瞬間だった。

「うぐっ!!」

ことりに胸ぐらを掴まれ、そのまま道の脇にある人氣ひとけのない小道に強引に連れ込まれた。そして壁に向かって身体を押され、そのまま壁にもたれかかった。ことりはそんな俺に力強く抱きつく。

「……嘘つき」

「えっ?」

「嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき」

「わわわっ!! ま、待てことり! 落ち着け!」

抱きついたまま、ことりは俺の顔を見て嘘つきと連呼する、感情のないいつもの目、だがしかし、涙を浮かべて。

「一哉くんの嘘つき! 帰ったらご褒美くれるって約束したのに!!」

「……あつ」

俺はことりの言葉で思い出した。

そう、俺は昼休みの終わりにことりと約束していたんだ。高坂に完全に流されてしまったからとはいえ、完全に忘れきってしまったのだ。

「ことりとの約束破つたのに穂乃果ちゃんにはご褒美あげてた！ 優しくしてた！ どうして穂乃果ちゃんにだけ……もうことりのこと好きじゃなくなったの!?!」

「違う！ あれは高坂に流されてただけだ！」

完全に暴走してしまったことり、高坂にだけご褒美をあげたと言うことりの目から更に涙が溢れる。違うと否定したものの、実際にやってしまったことには変わりない。深い反省感が俺を襲う。

「もう……我慢できないよ……」

涙をボロボロこぼしながら、ことりは俺をより強く抱きしめていく。強い圧迫感で、呼吸しづらくなるほどに、強い力で。

「……して」

「え？」

「忘れてたことりのご褒美、それと穂乃果ちゃんにしたご褒美、ここで全部して……っ」
頬を染めることりは、甘えた声で涙を流しながらそう言った。

ここは教室じゃない、ただの人気のない小道。そう、ここには俺たち以外、誰もいな

い。

だから

「んっ……あ」

俺はことりを抱きしめ返し、柔らかなこたりの唇を奪う。そしてそのまま、舌と舌を絡ませ、ことりを抱きしめる片方の手を離し、こたりの頭を優しくなでる。

「ぷは……えへへえ、ことりもご褒美もらえたあ♡」

「当たり前だろ、ことりは今の今までご褒美お預けされてたのにずっと耐えてたんだから」

「ふああ……ことり、もつと頑張ったらもつと一哉くんからご褒美もらえる……？」

「もちろんだ、ことりはお利口さんだからな」

「えへへえ、ことり頑張るう♡」

俺の手に撫でられることりは、いつも以上に甘えてきた。ご褒美を我慢してきただけはあるようだ。

俺はそんなことりを見ながら思う。

小学生のような感性を持つのは、高坂ではなくことりの方だったんだ、と。

甘い声で抱きつくことりを撫でながら、ポロポロと涙を流すことりを思い出し、心の中で反省を繰り返していた。

「はく、今日は補習で遅くなっちゃったわ。これだから受験生は……つて、あれ？ あれってことり……と、男!？」

一哉とことりが抱き合う小道の角には、黒髪のツインテールの少女が一人。

S t r a n g e t a s t e

*7 曇天 p e c u l i a r

ことりと別れ、俺は家路につく。

ことりの家と距離が近いから、家につくギリギリまでことりのそばにいられる。

改めて考えてみるとすごいことだ、初恋の相手と近くに住んでいて、その相手とこうやって付き合えて、ましてや相手と両思いで相手の方から求めてもらえる。まるで理想の生活を綺麗に描いているドラマやアニメみたいだ。

「・・・・・・・・へへっ」

思わずこらえきれずに声が漏れ、顔がニヤける。

嬉しくて、楽しくて、たまらない。今までだって楽しかったけど、今はそんなレベルじゃない。

ことりと別れてまだ数分も経っていないのに、もうすでに会いたくてたまらない。今

すぐにでも抱きしめたい、声が聞きたい、綺麗な髪を撫でたい。

そして、ことりと――

欲にまみれていた、そんなときだった。

「………っ!?!」

背後に人の気配を感じた気がして思わず驚いて振り返る。ことりと一緒にいるとき、人気がない道だったとはいえ、周りに邪魔されたくないその一心で警戒し続けていたつもりだった。

欲にまみれた俺の心が、たった今、別の気持ちで心を埋め尽くされる。

もし、さっきの光景をフアンの人に見られていたなら？

一瞬背筋が凍る感覚が俺を襲う。

もし本当に人が見ていたとして、それが高坂や園田といった同じクラスの人、もしくは他の、俺とことりが付き合っているということを知らない誰かだったなら……

「だ、誰かいるのか!？」

恐怖から焦りへと変わるのが自分でも分かる。

そんなことがあれば、ことりは下手をすれば、アイドルを続けられなくなるかもしれない。

女の子アイドルである以上、男がいるなんて印象ダウンにつながるに違いない。俺が欲に負けたせいで、ことりを満足させてあげたかったせいで、ことりに被害が及ぶなんて考えたくもない。

背後を見渡すが、誰もいない。全方向よく見渡して見るものの、さっきまでの気配は、今は感じられない。

気のせいだ、気のせいであってほしい。

そう思いながら、急いで帰ってことりに報告すべく、身体を正面に戻そうとした時だった。

振り返る瞬間、さっきまで何もなかったはずの電信柱の横から、見えた。

長い黒い髪が。

「 」

「矢澤、先輩？」

「に、にっこにっこにーっ！ あなたのはーてよに……」

お得意の自己紹介にで囁んでしまっいそのままの態勢で黙り込むその人は、他でもないことりのいるアイドルグループのメンバで、一つ上の先輩だ。

俺は安心してはあ、と息をつく。

恐れていたのは見知らぬ学校の見知らぬ顔。そうでないなら、ましてや同じグループの人なら、問題ないはず。

若干緊張しつつも、なぜ隠れたりしていたのかを確認するため話を切り出す。

「ど、どうしたんですか？ そんな怪しく電信柱に隠れたりして？」

「にこは隠れたりしてないよ？ えへっ」

「あ、あははっ、そうですか」

同じグループにいる人とはいえ、面識があつてかつ話したことがあるが、sのメンバーなんて、せいぜい高坂と園田くらいだ。他のメンバーは、ライブの時に顔を見た、あるいはすれ違ったことがある程度で、こうやって正面に立っているのなんて初めてだ。ライブのときと全く変わらない矢澤先輩の姿に、全くと言っていいほど言葉が出てこない。

頭を回せ俺、他でもないことりのため。もしここでこの人に何も聞けずに逃がしてしまえば、最悪はことりに何かしらの影響が出てしまう。

俺が黙り込んでいると、次は矢澤先輩が話を切り出す。

低いトーンで。

「ねえあんた、ことりと、何してたわけ？」

さつきまでとは打って変わり、笑みの一つもなく冷ややかな目で俺に威圧的に言葉を放つ。

それはまるで、何かを悟っているかのよう。

「あんた、ことりの何の弱みを握ったわけ？」

・・・え？

唾然とする俺に、矢澤先輩は続ける。

「ことりはね、純粹無垢でお人好しで、面倒な衣装作りまで任されてくれるような優しさもあつて、しかもバイトまで頑張つて、そのお金すら衣装代に回してくれるような、うちの大事なメンバーなの!? そんなひたむきに、毎日忙しいあの子に、男と遊んでる暇なんか無いのよ！」

口を開くごとに、言葉がだんだん荒くなる。

「ただ、そんな荒い言葉を使われても分かるのは、ことりのことをとても大事に考えてくれている。」

そして、なぜだろう。

「ことりとあんたなんかじゃ釣り合わないわ! どんな弱みを握ってるかは分からないけど、次、ことりに手を出すようなことがあつたら・・・ただじゃおかないわよ」

？」

この人は、俺とことりが付き合っているということを知らない。

ことり本人から仮に報告がなかったとしても、あの、ハイテンションで何でもペラペラと話す高坂、そして、アイドルに恋愛は……という部分を一番気にしているような園田ですら、矢澤先輩へは報告がないようだ。

加えて、俺たちがくつついているのは基本的に登校中や教室の中、あるいは放課後や休みの日だけで、確かに知らないと言われてもおかしくない、それだけ周りに気を遣ってきたつもりだ。

おかげでこの人は、俺が恐喝して無理矢理手を出したという勘違いをしているらしい。

この人はやはり、さっきの様子を見ていた。

しかも面倒なのは、何を言っても弁解できそうにないと思わせられるほどに真っ直ぐに、こちらを睨んでくるところ。

ことりのことを本気で守ろうとしているのがよく分かる。

「……………それだけだから」

それ以上は何も言わず振り返り、立ち去っていった。

俺はその場で、何も言えなかつたことに対する後悔と、なぜ知らなかつたのかという疑問2つが渦巻く頭を抱えたまま立ち尽くしていた。

矢澤は、南ことりを恐喝していたと思われる少年と離れた後も、あの少年のことを考えていた。

「ことり．．．．．私がなんとかしてあげるから」

一人眩き、憎いあの少年の顔と、頑張り屋で優しい南ことりの顔を思い浮かべては、拳をグツと握りしめつつ、力む足を前へ進める。

考えすぎて、後ろから迫る影にも気づけないままに。

「――、ふふっ」

「あ、あんた．．．．．」

朝、俺は昨日矢澤先輩から言われたことを頭に思い浮かべていた。

『こつりとあんたなんかじゃ釣り合わないわ！』

昨日まではそれどころじゃなくて気にもならなかったのに、今になってズキズキと胸を締めつける。

言われてみればそうだった。あんなに可愛くて優しくて、アイドルとしても活動しているこつりと、何もアピールできるものを持ち合わせていない俺なんか、釣り合うわけがない。

矢澤先輩と話すまで浮かれていた自分が愚かで、愚かで仕方ない。

もうすぐで登校時間を迎える。行かなければ。

玄関のドアを開けると、眩しい朝日に目を眩ませられ隠された、いつもの姿があった。

「おはよう、一哉くんっ！」

優しくて明るい、太陽にも負けない輝きを放つ彼女の姿は、今の俺には眩しすぎて見れない。

今一番、会いたくない人だ。

「……………おはよう、ことり」

「えへへえっつ、一哉くんに今日も触れましたっつ！」

いつもと変わらず抱きつくことり、毎朝の癒しになっているはずが、今の俺にはまるで槍を刺されたかのような痛みに襲われる。

『ことりとあんたなんかじゃ釣り合わないわ！』

そしてまた、この言葉が頭をよぎる。

俺じゃことりとは釣り合わない、俺じゃ、だめ。俺なんかじゃ……

思えば思うだけ、今のこの関係は、ただの俺の自己満足のように思えてきた。

ことりは今日も変わらずに俺に接してくれる、でもそれはいつまで続く？

今の勢いなら、μ, s は間違いなくもつと有名になる、そうすれば、俺の存在は邪魔になるのでは？

それに、うちの高校には男がいないから、たまたま俺が魅力的に見えただけなのでは？

近い将来、もしもことりが俺のそばを離れていってしまうなら、俺はどうなる？

今はまだ付き合ってそんなに経っていない、だとしたら、今の方がダメージは少ないのでは？

後で深い傷を負うくらいなら、ことりの邪魔になるくらいなら、いつそもう、俺は――

「ことり。急で悪いんだけど、俺と」
「ねえ一哉くん」

俺が最悪な言葉を吐く前に、ことりが俺の言葉を遮るように声を重ねる。
静かな、それでいて少し、圧を感じるような、そんな声で。

「昨日、にこちゃん与会ってた？」

「……え？」

にこちゃん、そのワードに一瞬俺の胸が締め付けられるのと同時に、なぜ知っているのかという驚きで思わず声が漏れた。

ことりはそんな俺の反応を見つつ、続ける。

「ごめんね？ 覗くつもりはなかったんだけど、別れた後、にこちゃんに似た声が聞こえたから急いで向かったんだけど……にこちゃんと一緒にいたんだね」

「っ!!! ご、ごめんことり！ それには理由があつて！」

俺の経験が語る、この状況はまずい。

普通のカップルだとしても、他の女と会ってたなんて知ったら間違はなくまずい状況になるのに、その相手がことりなら尚更——

いや、待てよ？ 俺は思う。

俺はさつき、言いかけた言葉を遮られた。でも今のこの状況ならむしろ、流れに任せ
ていけば、わざわざ頑張らなくても

別れる方向に持っていける。

なんて最低な男なんだ。別れの言葉を言うどころか、他の女の子と見られたのを言い
訳にしようとしているんだから。

でも、これはことりのためだ。

いいんだ、これで。

気持ち落ち着かせ、俺は口を開く。

「ああ、そうだよ。会ってた」

どれだけの暴言を吐かれてもいい。何をされたって仕方ない。
なんならもう

「・・・・・・・・・・」

—されたって、仕方ない。あのことりなら、それくらいは軽くやりそうだ。

「矢澤先輩と、会ってたんだ」

好きでいてくれて、ありがとう。でも——

「さつき、言いかけたんだけどさ」

さよならだ。

「えへへっ、正直に話してくれる一哉くん、大好きっ！」

「……………は？」

あの感情のない目を向けるかと思いきや、さらに嬉しそうに俺に抱きついてくることに、俺は呆気にとられる。

困惑する俺をよそに、ことりは言葉を続ける。

「にこちゃんとい哉くんが離れたあと、にこちゃんに何をしてたか聞いたんだよね。そしたらにこちゃん、あんな男に近づくんじゃない！　なんて本気で怒るもんだから、慌ててことり、違うんだよ。ことりたちはお付き合いしてるんだよ。って言ったの！」

ことり、まだ穂乃果ちゃんと海未ちゃんにしか報告してなかったの忘れてて……ごめんね？」

ごめんね、その声に合わせ、申し訳なさそうに涙を浮かべながらこちらの様子を伺うことり。

すごい剣幕で迫られることを想像していた俺にとって、予想外すぎる反応に、言葉を選べず黙り込む。

「にこちゃんにも、ちゃんと報告いれたから、ことりたち、もう何も気にすることないの」
声を震わせながら、涙を浮かべながら笑みを浮かべることりの表情は、あまりに綺麗で、でもとても切なく感じてしまつて、申し訳なくて、さつきまで別れようと思つていたのが馬鹿らしくなつて。

俺は何を血迷っていたんだろう。

ことりは俺を求めてくれる。たとえ周りに何か言われても、きつとことりは俺を離さないでいてくれる。

ことりと俺が釣り合わない、そんなのを気にするくらいなら、俺はことりに釣り合うように、ことりを喜ばせてあげられるように努めればいいだけ。

「ことり、ごめんっ！」

俺はことりを全力で、でも締め付けすぎないよう配慮しつつ、抱きしめる。

俺はことりと別れたくなんかない。ことりが俺を求めてくれる以上、俺はことりの傍にいる。

そんな気持ちで、ことりをしっかり抱きしめる。

「ごめんな。俺もう勝手に他の女になんて会わないから、だから！」

「ふふっ、ことりが悪いのに謝るなんて、本当に一哉くんはいい子さんですっつ」

柔らかいことりの手で顔を撫でられ、そして温かさに心まで温かくなるのを感じる。

もう、間違ってもことりと別れようだなんて思わない。

首に手を回し抱きつき返してくれたことりの耳元で、自分に言い聞かせるように言う。

「ことり、大好きだ。もう二度と離れない」

これは俺の覚悟、そしてことりへの愛の言葉。

絶対に、別れたりなんか、しない。

ことりもそれに応えるように、耳元で囁く――

「ことりも大好きですつ、だから」

「こ……と……り……と……別……れ……よ……う……だ……な……ん……て……、……今……後……一……切……考……え……た……ら……だ……め……で……す……よ……つ」

次の授業、俺たちのクラスは別の教室でやるため、仕度を終え、その教室へと向かう。ことりたちは何やら職員室へ呼び出されたようで、移動は俺一人だ。

「また高坂が問題起こしたからかな」

いつものことだからと、呆れつつも少し寂しさを覚えつつ廊下を歩いていたら時だった。

見覚えのある、長い黒髪のツイントールが向かいから歩いてきた。

昨日の件がある分、少し気まずさもあるのだが、昨日言えなかったことを言うにはちよūdい。

俺とことりは付き合ってる、何言われようとも別れるつもりはない。

よし、心の準備はできた。言うぞ。

俯いて覚悟を決め、足元が見えたタイミングで顔を思い切りあげた。

「あのつ、矢澤先輩!! 昨日の件で……」

言おうとした、だが、言えなかった。

「こつとりに、何をしたのよ」

すれ違い様、眩くように声を発した矢澤先輩の表情を見たせいで。

矢澤先輩の表情は、昨日までとは違う。

暗く沈み、目元に濃いクマが出来ていて、まるで別人のようだった。

* 8 揺らぎ anxious

特別教室で授業が行われている中、俺は授業の内容もそこそこに、さつきすれ違った矢澤先輩の異様な雰囲気を感じ出していった。

遠目から見ても分かるであろう目の下の濃いクマ、そして虚ろな目。少なくとも昨日の矢澤先輩の目はしっかりとしていて、クマなんてなかった。

あと、目の方に意識が行き過ぎていてその時は何も思わなかったが、髪もやたらと荒れていたような気がする。まるで起きてから一切整えないで学校に来たかのような。

人前に立って踊ったり歌ったりしているような女の子とは思えないような、そんな有様。たとえばアイドルをやっていたとしても、年頃の女の子なら多少は気にしているようなものなの。

考えはいろいろ頭に浮かぶけれど、どれもしっくりこない。

例えば、俺とことりがそういう関係になっっているのが公おみやげになっちゃってしまったらまずい、なんていうことをただひたすらに考えていたとする。でも、それなら昨日あんなに簡単

に話を終わらせるわけがないと思うし、ましてやさつきすれ違ったわけだから、不安に思うのなら追い打ちをかけるような何かを言ってくるはず。

3年生だから進学のための勉強をするために徹夜でもしたのか？ と考えたりもしたけれど、そもそもテストはまだ先の話だし、徹夜までして勉強をやることにメリツトを感じるようなことはない。

近いうちにライブイベントは控えていないそうで、ことりもここ最近は俺にべつたりというような状態。別にイベントの準備に追われているから寝れていないというわけでもないはず。

俺の頭の中で思いつく可能性はこのくらいで、他に思いつくのは、少なくともあんな状態にまでなるようなことはない。

なら、なぜ？

モヤモヤした頭を少しでもリフレッシュしようとして、窓の外でも見ようかと思った時だった。

「………」
「?!」

窓際に座っていることりが、俺の方をジッと見ていたことに気がついた。

ことりは俺と目が合うと、にっこりと笑った。

そう。

蛙を睨む蛇のような目つきで。

思わず身を震わせてしまった。

あまりにも考え込んでしまっていて、ことりに見つめられていたことに気付かなかつたことに驚いたが、あの寒気のするような鋭い目つきを見た途端、身体がいうことを聞かなくなった。

目が離せない。あの鋭い目から。

怖くて身体が固まってしまっている、まるで金縛りにでもあったかのようなのだ。

額に冷たい汗が浮かぶ。息も苦しいような気がする。

どうして、どうして口だけ笑ってるんだ。

どうして。

どうして——

「………月くん？ 皆月くん？」

「ひっ!？」

俺を呼ぶ声に驚きすぎて、思わず膝を思い切りあげてしまい机の下に強くぶつけてしまった。

声の方に顔を向けると、きよとんとした表情で先生が俺を見ていた。

「皆月くん？ 授業中によそ見はダメですよ？」

「は、はい。すいませんでした」

わざとらしく、子供を甘やかせるような声色で注意する先生に、俺は軽く荒れた呼吸を整えながら返事する。周りからはクスクスと笑い声が聞こえる。

かいた汗を軽く拭いながらも、見たくはないが見なきやいけない気がして、変わらず送られてくる視線に再度目を向けた。

クラスが和やかな空気に包まれている中。

ことりは、笑っていた。



昼休み、少しの不安を感じながらも、いつものようにことりと昼飯を食べるため、準備をしていた。

「あれ？」

しかし、ことりの姿が見えない。

まだ昼飯に行く前だった高坂たちを捕まえて聞いてみたが、高坂たちも知らない間になくなってしまったらしい。

いつもだったら、俺が誘うより早くことりの方から来てくれるし、何かあつて一緒にいられないときは連絡をしてくれていた。ただ今回に関しては、スマホのメッセージアプリにすら連絡が来ていない。

何か嫌な予感がする。特別教室での件も相まって、すごく不安を感じる。

探しに行こう、そう思つて席を立つた瞬間だった。

「あ、あのっ!」

右の方から、少し緊張しているかのような声で俺を呼ぶ誰か。

「あ、あなたが、皆月先輩……ですか?」

振り向いて確認したその顔には、見覚えがあつた。

俺はその子についてくるよう言われたため、ことりにメッセージアプリで伝え、まだ教室にいてくれた高坂たちにも声をかけた上で、その子についていった。



その子に呼び出されたのは、学校で飼っているアルパカの小屋のすぐ近く。あまり人が寄り付かない、こんな静かな場所に呼び出されたのは今までで初めてだ。

歩くのを止めると、その子はおもいながら俺と向き合う形で正面に立ち、話し始めた。

「わ、私、小泉花陽こいずみ はなよって言いますー！」

そう、俺を呼び出したのは、小泉花陽だった。

わざわざ自己紹介なんてしてくれなくたって、充分知っている。なぜなら、この子もことりと同じ、μ sのメンバーだからだ。

でも、こうやって直接話すのは、昨日の矢澤先輩と同様に初めてだ。

こんな場所に呼び出されたこともあり、俺も少し緊張する。

小泉さんは続ける。

「さっそくなんですけど．．．あ、あの、皆月先輩って、ことりちゃんとお付き合いしてるって、本当なんですか？」

恐る恐る、といった様子で俺に尋ねてきたのは、ことりとの関係だった。

矢澤先輩の件にしてもそうだが、ことりから直接メンバーに報告したというのは、高坂と園田以外にはないらしい。余計にことりが何を考えているのか分からなくなる。

伝えるメンバーを限定しなかったのか、あるいは幼馴染2人だから打ち明けたというだけなのか、それとも。

考えるのもそこそこに、不安そうに見つめてくる小泉さんに、俺は答えた。

「うん、俺はことりと付き合っているよ」

それ聞くと、小泉さんは黙り込む。

不安そうな、悲しそうな。何とも言えない表情で。

「何かあったのかい？」

何となくだが、その表情の訳が分かっていた上で、あえて俺はそう尋ねた。

「あ、あの」

言いづらそうに小泉さんは口を開く。

「さ、最近、ことりちゃんの様子がおかしいんです」

予想は当たっていた。

ことりとの関係を聞いてきた時点で嫌な予感はしていたんだが、どうやらことりはμ sのメンバーの前でも様子がおかしいようだ。

悲しそうな顔で俯きながら、小泉さんが続ける。

「ちよつと前からのことなんですけど、1つの練習が終わるたびにスマホを開いては、嬉しそうにしているのをよく見るようになったんです。今まではそんなにスマホを見ることなんてなかったのに。それだけだったら、皆月先輩からメッセージが届いたからつ

ていうことで、今なら理解ができるんです。だけど」

小泉さんの声が一瞬止まる。そして、つばを飲み込む。

「た、たまに、すごく怖い目をしている時があるんです——っ!」

怖い目、その言葉を出した後の小泉さんは、急に何かに怯えるような様子に変わった。

「い、今も! 何でなのかは分からないんですけど、その目を見た時の怖さを感じるんです!」

「今も?」

「は、はい! 気のせい、だとは思うんですけど」

気のせいだと言いながらも、落ち着きのない様子で周りを見渡している。一応俺も周りを見渡してみるが、やはり誰もいるようには見えない。確かに隠れられそうな場所はいくつかあるけれど、俺には人の気配なんて感じられないから、小泉さんの気のせいじゃないかと思える。

ある程度周りを見渡し、誰もいないことを確認し安心した表情を浮かべる小泉さんが、話を続ける。

「何を考えているのか分からないような、そんな目をしてるんですけど、私から見るとそれがすごく怖く感じるんです」

何を考えているのか分からない、おそらくそれは、俺が前に何度か見た、あの感情のない目と同じものだろう。その怖さを今感じたのだとしたら、急に落ち着きがなくなつて、周りを見渡ししたくなるのも分かる。俺も同じ反応をするだろう。

「目つきの話だけだったら別によかつたんです。それ以外は別に変わつた様子は見られなかつたので」

小泉さんは、再度周りを見渡し、少し震えた手を胸元で抑えながら、続ける。

「で、でも、にこちゃ・・・矢澤先輩から今朝、こつ言われたんです」

「ことりには近づくな」、って。昨日までとは全く違う雰囲気の矢澤先輩から」

一瞬、俺の身体が固まった。

小泉さんも、あの矢澤先輩を見ていたらしく、その上忠告までされていたなんて思っ
てなかった。

しかしそのおかげで、矢澤先輩があんな状態になってしまった理由が、ようやく分
かった。

ことりには何かされたんだ。

俺にならまだしも、μsのメンバーの前ですら、あの雰囲気を出している。それど
ころか、内容は分からないが、矢澤先輩をあそこまで追いやるほどの何かを、ことりは
やったらしい。

ことりが時折おかしくなるのは俺も充分知ってるし、そのことを知っているのは俺だ
けだと思っていた。加えて、あの状態になったことりから迫ってきたとしても、あそこ

までやられることはないと思う。

だとしたのなら、まだ俺が知らない、ことりの本性があるのかもしれない。もう少し、そのことを聞きたい。

いつ、どうやって、何をことりがやったのか、知りたい。

そんなことを小泉さんが知っているとは思えないけど、少しでも情報が欲しくて、小泉さんに問いかけようとした。

「ねえ小泉さん」

その時だった。

「一哉く〜ん？ どこかな〜？」

よく知っている、見た目通りの柔らかかな、だけどどこか不気味さを感じさせる声で俺を呼ぶ。

俺と小泉さんはその声に驚き、顔を見合わせる。

小泉さんは、矢澤先輩からの忠告があつたからだろう、少し泣きそうな顔をしながら、慌ててお辞儀をした後、声のする方とは真逆に駆けていった。

残された俺は一人、その場に立ちすくんだまま声がする方を見続ける。

「どこですか〜?」

呼ぶ声が徐々に近くなる。

自分の彼女だ、別に怖がる必要なんか何もない。今はもう小泉さんは近くにいない。昨日絶対に別れないって誓ったばかりじゃないか、会いたくない理由なんてないはずだ。

なのになぜだろう。

今はその姿を見るのが、何よりも怖い。

メッセージアプリで、小泉さんと少し話してくるとは伝えたいし、ここに着く前に、高坂から、ことりには伝えたと返事が来ていたのは確認した。特に怖がる理由はないはず。

声と共に、足音が近づいて来る。

もう、すぐそこまで来ている。きつと、俺が呼べばすぐに顔を出すのが分かるくらいには近くにいる。

呼吸が苦しくなる。見つけられた俺は一体、どんな態度で、どんな言葉をかけたい？ そんなことすら分からない。

分からない。分からない。

どうすれば――

呼ぶ声が止まった。

足音も聞こえない。

「え？」

思わず声が漏れる。

それはあまりにもまぬけで、情けない声だった。

でも声が出たおかげで、少しずつ身体から力が抜けていくのが分かる。

荒れた呼吸を整えながら、ホッと胸を撫で下ろした。

「見つけましたあ」

「つはあつ」

「やつと見つけられたあ」

突然の、背後からの柔らかな声と身体に、発作でも起こしたかのような、声にならない声漏れる。

震えることもなく、ただただ硬直する俺の身体に、絡みつくように抱きつく。

「メッセージ届いたから探したんだよお？」

「あ、ああ、ごめんな」

甘えた声で、少し安心したような声色。

一昨日までの俺なら、すぐにでも振り向いて正面から抱きしめ返すだろう。

けど、今の俺にそこまでの勇気がない。

というより、さつきまで聞いていた話が頭をよぎって、まともに対応できる気がしない。

どうしても、ことりが何をしたのかが知りたい。

でも、ことりに直接それを聞くのは、危ない。そんな気がしてならない。

それなら、と、俺は1つ、決断する。

昨日ことりに、勝手に女と会わないと言ったばかりではあるけれど、そうでもしなきゃ、俺はまともなことりと接することができなさそうで怖いから。

俺は

矢澤先輩に直接話を聞きに行く。

*9 焦燥 message

その日の放課後。俺は一人で家路についている。

今日は *μ*、*s* の練習があることもあって、軽い挨拶をしただけで別れたからだ。

いや、関わりを持たないようにしていたと言ったほうがいいかな。

アルパカ小屋でのことを目の当たりにして、とてもイチャつこうなんて思えなかったから。

俺がことりの傍にいるだなんて誓っておきながら、やってることはこの様。

あまりの不甲斐なさに自分を攻め立てようとすると、さっきのことりから逃げることは妥当だと自分を甘やかす心がせめぎ合う。

いつもはことりと一緒に歩いているこの家路も、俺一人だとただただ静かで、多少の不気味さすら感じる。

その何とも言えない不気味さを感じながらも、どうやって矢澤先輩と話をしたものかと考えつつ足を速める。

直接聞きに行くとは言ったものの、学校内で話するにはあまりにリスクが高い。

いつもことりと一緒に過ごしているから、ほぼ俺のフリーな時間はない。

強いて言えばことりが保健委員の仕事があつて教室を離れている時くらいだ、そんなわずかな時間・可能性なんて無いに等しい。

μ sの練習が終わつたあとの矢澤先輩を捕まえる？

……いやいや、学校を出るまではきつとメンバーと一緒にだろうし、学校を離れてから後をつけるだなんて、そんなのストーカーじゃないか。

じゃあ一体どうすれば？

考えれば考えるだけ心が沈んで、ただでさえ不気味なこの道が、なおのこと不気味さを増しているかのようにすら感じる。

あまりに不気味に感じるせいか、誰かにずっと見られているかのような錯覚すら感じて、速めた足がさらに速くなる。

足が速くなればなるだけ、それに合わせるように心も落ち着かなくなる。

あのすれ違った時の矢澤先輩の目のクマの濃さ、小泉さんから聞いた情報、そしてさつきのことりの様子。

もし小泉さんと会うとき、ことりにメッセーリアアプリで連絡してなかったり、高坂に伝えてもらえていなかったらさらに酷いことに――

「あれ？」

やっとの思いで家のドアの前に立ったその瞬間、俺の頭の中に1つの考えが浮かんだ。



「この時間なら、もう大丈夫かな」

晩ご飯を済ませ、少しばかり時間を潰した俺はスマホを手に取り、メッセーリアアプリ

を開いた。

『ごめん、今時間あるかな？ 聞きたいことがあるんですけど』

簡単にメッセージを打ち込み、送信した。最近はことりとばかりやり取りをしていたから完全に頭から抜けていたけれど、俺が持つてる連絡先はことりだけじゃない。

何ならさつきだつて、その子とやりとりしていたんだ。

数分経たないうちに既読マークがつき、返事が来た。

『わあ！ 皆月くんからメッセージが来た！ 今日の良い夢見れそうだよ〜！』

わざわざメッセージに書かなくてもいいようなことを書いて送ってくるあたりが、実にその子らしい。こっちは真剣に考えてこの択を選んだというのに。

早急に話を進めたい、その一心で本題に入ろうとメッセージを打ち込んでいた時だった。

相手側からメッセージが送られてくる。

『そだ！ メッセージじゃつまないから電話しようよ！ 今からかけるね！』

「……は？」

こちらの返事も待たずに一方的にメッセージが送られてきたかと思えば、次は着信音が鳴り響く。

その勢いに若干の苛立ちを感じつつ応答する。

「もしもし」

『あ！ 繋がった！ もしもし皆月くん!?!』

「もう少し落ち着いてくれねえかな、高坂」

相手は高坂。有無を言わさない流れで通話まで持つて行かれた。

正直こうなりそうな予感はしていたけれど、ここまで強引に持っていられるとは思っていなかった。

何せ俺が高坂に聞こうとしていたのはただ1つだけ。

矢澤先輩の連絡先をもらうことだけだったのに。

高坂は、俺が持っている連絡先の中で唯一の、ことり以外の μ sのメンバー。もうちよつとまともな連絡先を持つてるなら最初から高坂になって聞こうとしない。

ただ今回は、もう高坂でもいいと思えるくらいには、矢澤先輩とのコンタクトをとりたい。

多少は時間を食ったとしても、確実に連絡先が欲しい。
できるだけ、手短に。

「高坂、1つ聞きたいことがあるんだけど」

『あ、そうだったね！ ごめんごめん！ 何かな？』

「実は、矢澤先輩の連絡先が知りたいんだけどさ——」

俺はそれを口に出した後によつと、肝心なことを忘れていたに気がついた。

ことりに、矢澤先輩の連絡先を求めていたことを高坂にバラされたら？

ことりにバレずに矢澤先輩の連絡先を手に入れられるならと考えた策だったのに、やりにもよつて高坂に頼つたのだろうか。

高坂は口が軽い。ましてや同じクラスで、休み時間にはことりと園田と一緒にいるのに。

そんなことすら失念してしまうなんて、とんだ大失態だ。

『——にこちゃんの、連絡先？』

なんで？ とでも言いたげな、少し落ち着いたトーンで聞き返す高坂の声で焦燥感に駆られてしまい、言葉が出てこない。

「え、いや」

せめてこれが高坂でなく園田なら、まだ何とかなつたのに。

休み時間にポロつと口に出されたりでもしたなら……

ただでさえ他の女子と会わないところりに約束した上で、なおもことりに秘密で高坂と電話をしているのだから、気づかれればただじゃ済まない。会ってなければいいとかそんな問題じゃない。

「えつと」

頭を回せ俺、やってしまったことはしょうがない。どうにかこの場をやり過ごさなきゃ。

「高坂、今のはその……」

全く言葉が出ない。発言を撤回しようにも強引にもらおうにも、どっちにしてもリスクしかない。

もう、だめか——

『いいよ、あげる!』

「……ええ?」

答えは一瞬だった。

ものすごくあっさりと、高坂はそう答えた。

あまりにもあっさりしすぎていて、焦っていた心が少し落ち着きを取り戻した。

ただ、問題は連絡先をもらえるかどうかじゃなくて、この話を高坂に持ちかけたこと。結局連絡先をもらえても、高坂がことりにバラせば一発で終わりだ。

だけど、俺の焦りとは裏腹に、高坂から出た言葉は意外なものだった。

『だけど皆月くんがにこちゃんの連絡先欲しいだなんて言うとはね、意外だったよ。理由は分からないけど大丈夫！ この事はことりちゃんには内緒にしてあげる！』

「ほ、本当か？」

『うんっ！ 穂乃果、約束はちゃんと守るから！』

「助かる、本当に助かるよ」

『えっへん！』

電話越しに胸を張っているのだろう高坂の声に、俺は心底安心した。

こういうとき、高坂なら間違いないく俺を茶化してくるだろうと思っていたし、ましてや言わない約束だなんてそんなことを言ってくるとは思ってなかった。

今はその威張った声が、何より頼もしい。

『じゃあ早速だけど、にこちゃんの連絡先送るね！ にこちゃんには許可とつてないけどね、えへへ』

そう言つて電話を切るとすぐ、高坂から連絡先が送られてきた。

余りにも事が上手く運びすぎていて、逆に不安にもなりはしたものの、何にせよ矢澤先輩の連絡先を手に入れることに成功した。こんなになんて都合よくいつていいのだろうか。

あとは高坂が思わずポロっと口に出したりしないことを願うばかりだ。

「さて、と」

俺は早速、高坂からもらつた矢澤先輩あてに、メッセージを送る。

皆月です。ことりの件について、どうしても聞きたいことがあるので、高坂に連絡先をもらいました。勝手に申し訳ないですが、よければ返事をください。

